

fig.379 河道出土土器・管玉 1~3:須恵器 5:碧玉製管玉S=1:2 他は土師器

### 3.まとめ

今回の調査では古墳時代の前期から中期にかけての集落址が検出された昭和61年度の調査と考え合わせると、有井地区では古墳時代初頭頃から集落が営まれ始めた。有井地区のほぼ中央には、西から東に流れる旧河道があり、この旧河道と現長尾川の間の自然堤防上に当初、集落が営まれた。その当時はすでに、この旧河道は後背湿地化していたと考えられ、水田として利用されていた可能性がある。古墳時代前期から中期にかけては、この自然堤防上に集落が営まれたが、中期中頃に火災と洪水のため集落は廃絶し、古墳時代後期には北側山際の微高地に移っている。これは洪水を避けるためであったと考えられる。古墳時代後期後半にはこの集落も廃絶し、対岸の豊浦地区や宮ノ元地区に移ったものと考えられる。

以上のような宅原遺跡有井地区での集落の変遷の中で、今回の調査では自然堤防上に立地する古墳時代前期から中期の竪穴住居址が検出され、集落変遷の時期を考える上で明確な資料が得られた。また、神戸市内でも発見例の少ない多角形住居址や、古墳時代中期中頃=須恵器使用開始直後の大形の方形住居址も見つかり、集落内での個々の遺構の位置づけも今後考えていく必要がある。

### 32. 宅原遺跡（豊浦地区）

#### 1. はじめに

昭和58年より北区長尾町において、県営圃場整備が開始され、それに伴う埋蔵文化財の発掘調査を同年より開始した。

今年度は、長尾町宅原の豊浦地区及び長尾町上津の下上津地区、上上津地区、三尊谷地区で圃場整備事業が計画され、そのうち豊浦地区において国庫補助金を得て埋蔵文化財の調査を行った。

調査は、水田造成、排水路、パイプライン、上水道管設置等によって遺物包含層及び遺構検出面の削られる部分について行った。調査区は12ヶ所に分かれている。

調査地の存在する長尾川右岸の地形は、長尾川によって形成された谷を南に望む丘陵から数本の尾根が櫛状に谷に向かって延び、それぞれの尾根の先端には低位段丘が形成されている。宅原遺跡豊浦地区はその低位段丘の一つに立地する。



fig. 380 調査地位図 S = 1 : 5000

## 2. 調査の概要

### (1) 第1トレンチ 基本層序

第1トレンチの基本層序は、上から第I層現耕土層、第II層床上層、第III層淡灰色シルト層（近世耕土層）、第IV層黄茶褐色粘土層（近世床土層）、第V層灰色シルト層（中世末期～近世初頭耕土層）、第VI層茶褐色シルト、明黃褐色粘土混土層（中世末期整地土層）、第VII層明茶灰色粘質シルト層（中世後期整地土層－第1遺構面）、第VIII層茶灰色粘質シルト層（中世遺物包含層）、第IX層青灰色粘土～シルト層（平安時代～中世遺物包含層）、第X層明褐色砂岩質シルト層及び黄褐色粘土層（地山－第2遺構面）となる。但し、この調査区は南西から北東に向かって低くなっているため、調査区の南西側約1/2は、第V層灰色シルト層下で地山が現れるため第1、第2遺構面の区別はできない。

### 第1遺構面

第1遺構面は、第VII層明茶灰色粘質シルト層の上面で、検出できる。しかし、調査区の南西側で検出された遺構は、先記の理由で第1、2遺構面のどちらの時期に属するかは遺物が出土しないかぎり判断できない。

この遺構面では、土坑4基（SK01～04、SK11）と溝2条、ピットが検出された。土坑はいずれもその形状から水溜めの土坑と考えられる。SK02は上場の直径1.2m、下場の直径0.7m、深さ0.5mの橢鉢形の土坑で中に焼けた石を10数個投棄してあった。SK03は直径1.3m、深さ0.7mの円筒形の土坑でその形状から桶を埋めていた可能性がある。以上の2基の土



fig.381 第1トレンチSK02～04(南から)



fig.382 第1トレンチ第1遺構面平面図

坑の回りには、それぞれ4基の小ピットがあり、簡単な上屋構造物があつたと思われる。SK04は、上端直径2.1～2.5mの楕円形、下端は一辺0.8mの方形で深さ0.9mを測る。その形状から木組みの枠があつたものと考えられる。

これらの遺構は、16世紀前半の整地土を切り込んで作られており、16世紀後半～末の整地上によって埋められている。

#### 第2遺構面

第2遺構面では掘立柱建物址1棟、棚列1条、土坑12基、溝22条、ピットが検出された。これらの遺構は、10世紀前半（第I期）、12世紀中頃～後半（第II期）、13世紀後半～14世紀（第III期）の3時期に大きく分けられる。

#### 第I期

10世紀前半の遺構は、ピットが数基確認できるのみである。これらのピットは建物としてまとまるものはない。しかし、後に述べる第2遺構面直上の遺物包含層からは須恵器の壺・皿・壺・臺の他、綠釉陶器の壺、灰釉陶器の三足皿等も出土しており、この時期の建物等がこの付近にあった可能性は高い。

#### 第II期

12世紀代の遺構としては土坑、溝、礫群、ピット等がある。礫群は、調査区の南半に長さ4.7m、幅1.3mの範囲で拳大の礫を集めている。この礫



fig.383 第1トレンチ第2遺構面南半  
(西から)



fig.384 第1トレンチ第2遺構面平面図

群中からは須恵器の塊・甕が出土している。またS P171からは「景德元寶」「元豐通寶」「聖宋元寶」各1枚が、S P173からは「開元通寶」「熙寧元寶」各1枚と「皇宋通寶」2枚が、付近の遺物包含層からは「治平元寶」1枚が出土している。

#### 第Ⅲ期

13世紀後半～14世紀代の遺構は、掘立柱建物址S B01と土坑、溝、柵列、ピットが検出された。

#### S B01

S B01は $2 \times 3$ 間(5.0×6.3m)で南北棟の掘立柱建物址である。柱穴内から土師器の鍋や須恵器の塊片が出土しておりこれらの遺物から13世紀後半の遺構と考えられる。

#### 土 坑

S K06は桶を埋め込んだ直径0.8mの円形の土坑で、桶の側材と備前焼の大甕の胴部が出土している。

S K07は4.9×4.1m、深さ0.7mの楕円形の土坑で、S D12とS D21から水が流れ込みS D11とS D22に流れ出るようになっている水溜状の土坑である。底には葉や草等の有機物が堆積しており、埋土からは丹波焼の甕、備前焼の壺、土師器の鍋等が出土している。S K14は2.3×1.5m、深さ0.4mと2.3×1.2m、深さ0.2mの二つの土坑を合わせた瓢箪形をした土坑である。中には、拳大の礪が多く埋められており、礪中より須恵器の塊、小皿などが出土している。

#### 溝

#### 柵 列

S D11～S D13、S D21、S D22はS K07付近でほぼ直交する溝である。

S D12、S D21の南西側は一段高くなつており家地を区画する溝と考えられる。また柵列S A01はS D12に並行しておりこれも家地を区画する柵と考えられる。

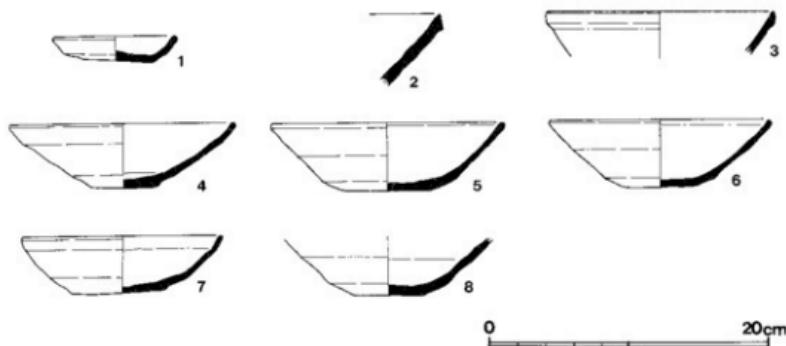


fig.385 第1トレンチSK14出土遺物 3:白磁 他:須恵器

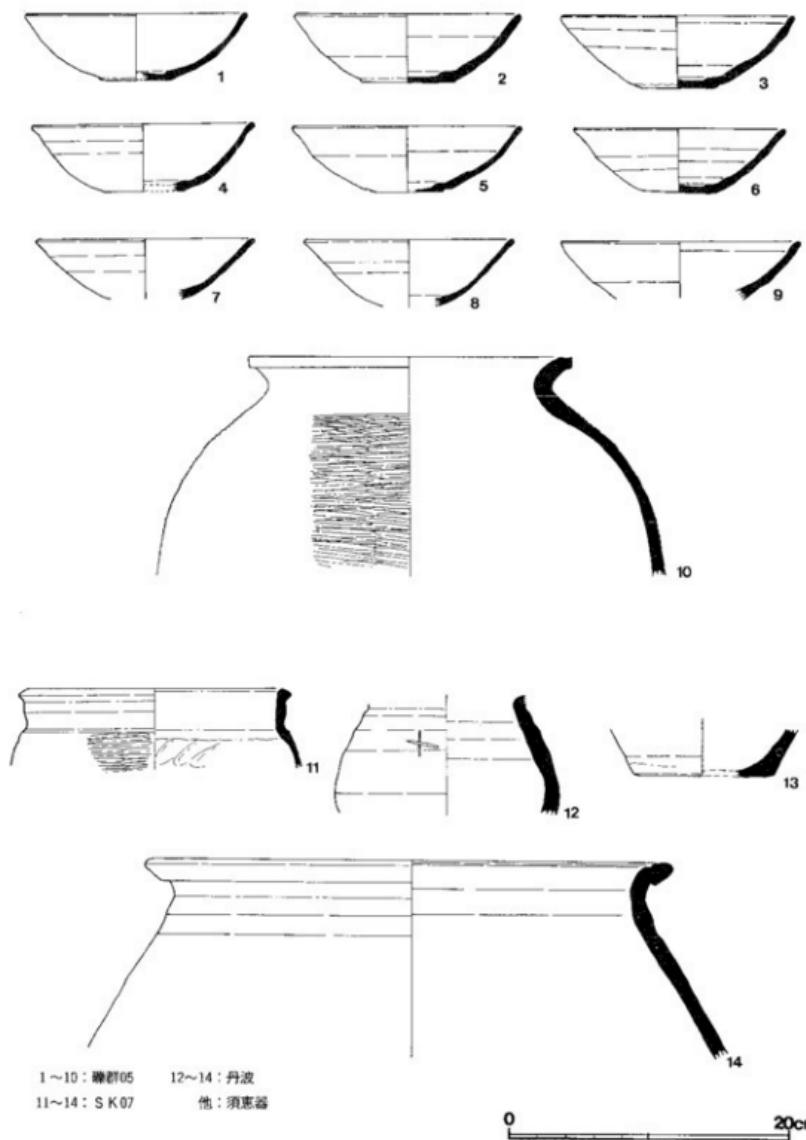


fig.386 第1トレンチ櫛群05・SK 07出土遺物

**遺物包含層** 第V層灰色シルト層からは須恵器、土師器片の他に中国製青花の碗、唐津焼の天目茶碗等が出土している。これらの遺物は16世紀末～17世紀初頭の時期と考えられる。

**出土の遺物** 第VI層茶褐色シルト、明黄褐色粘土混土層からは、中国製青磁皿、瀬戸・美濃焼の天目茶碗、盤、小皿や丹波焼の擂鉢、甕、石鍋などが出土している。これらの遺物は16世紀代のものと考えられる。第VII層明茶灰色粘質シルト層では、調査区北端で礫が集中して埋められておりその礫中から14～16世紀の土師器の鍋や丹波焼の擂鉢等が出土しており、またこの付近からは多くの鉄滓や焼石が出土している。第IX層青灰色粘土～シルト層からは10世紀前半の須恵器の壺、皿、壺の他、縁釉陶器の壺、灰釉陶器の三足皿等が出土している。また第VII層明茶灰色粘質シルト層～第IX層青灰色粘土～シルト層から鉄鎌や刀子、釘等の鉄製品も多く出土している。

(2) 第2トレチ

第2トレチは南北に長いトレチであるため現水田畔を境にA～I区に分けている。

A 区

A区では溝3条と落ち込み1基、ピットが検出された。溝SD01は第4トレチで検出されたSD01の続きと考えられる。ピットは並ぶものはあるが建物にならず、柵列と考えられる。遺構からの遺物の出土は少なく、時期の確定はできないが、遺物包含層出土の遺物から12世紀後半～14世紀前半の遺構と考えられる。

B～F区

B～F区と第5トレチでは遺構は少なく、溝1条とピット数基を検出した。遺物も少なく遺物包含層から中世の須恵器、土師器片が出土したのみである。

G, H区

低位段丘先端付近に位置するG, H区では古墳時代中期の竪穴住居址1棟、鎌倉時代の木棺墓1基、近世初頭の竪穴状建物址、埋桶土坑、埋甕土坑、集石土坑が検出された。

SB02

SB02は古墳時代中期の竪穴住居址である。形状は、南北4.5m、東西推定5.2m、深さ0.4mの隅円方形で、東側2/3は削平されている。主柱穴は4基で、床面が残存する範囲では周壁溝を巡らす。中央に土坑があるが、焼けておらず炉ではないようである。

遺物は、床面から土師器の甕、高壺が、住居址内堆積土から甕、高壺、小型丸底壺、台石等が出土している。時期は布留式併行期の新しい時期と思われ、5世紀前半と考えられる。



fig.387 第2トレンチS B02完掘状況(南から)

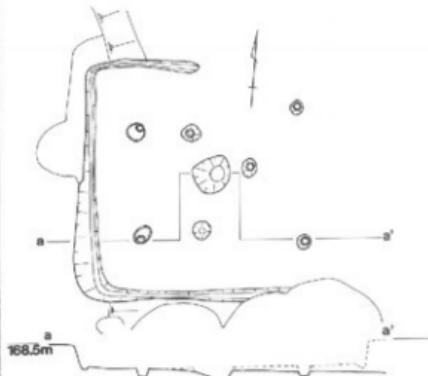


fig.388 第2トレンチS B02平面・立面図 S = 1 : 100



fig.389 第2トレンチG・H区全景(南から)

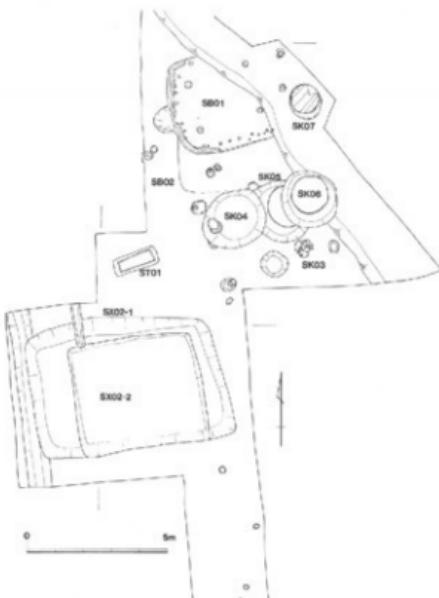


fig.390 第2トレンチG・H区平面図

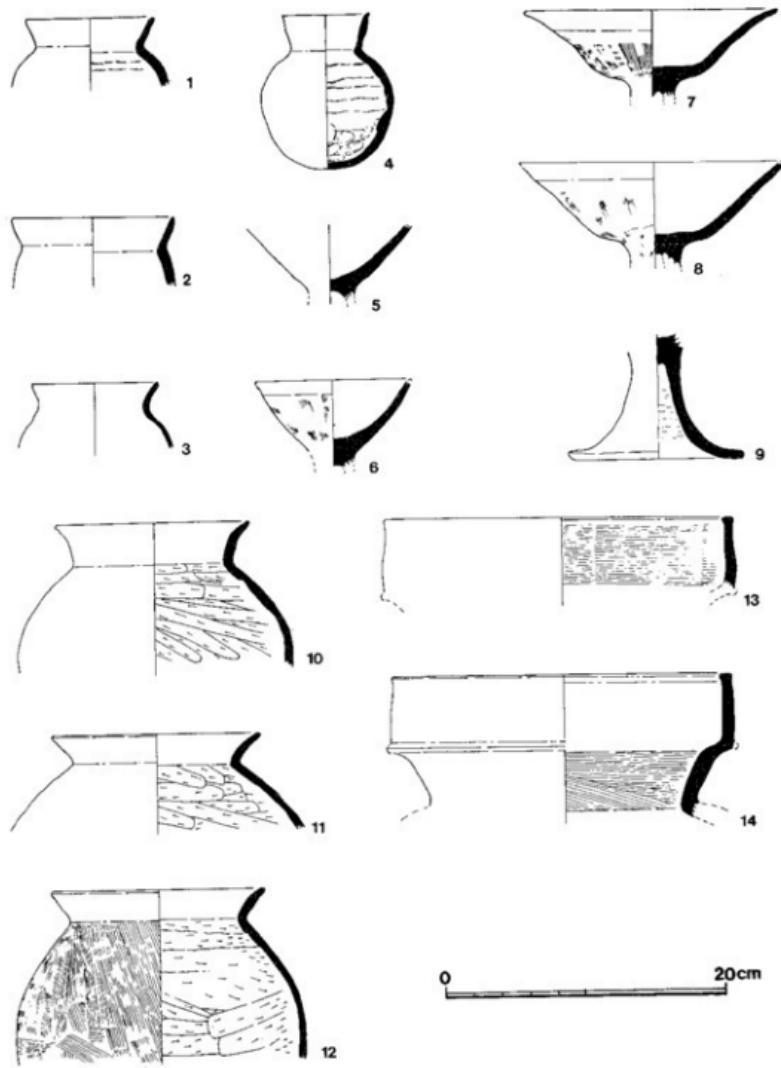


fig.391 第2トレンチSB 02出土土器

S T 01

S T 01は中世前期の木棺墓である。主軸は東西方向から若干北に振っている。掘形の大きさは長さ1.5m、幅60cm、深さ30cmである。底には木棺の痕跡があり、その大きさは長さ1.2m、幅45cmある。棺内の東端から白磁碗、須恵器塊、須恵器小皿の各1個が出土しており、頭位は東を向いていたと思われる。時期は13世紀初頭と考えられる。

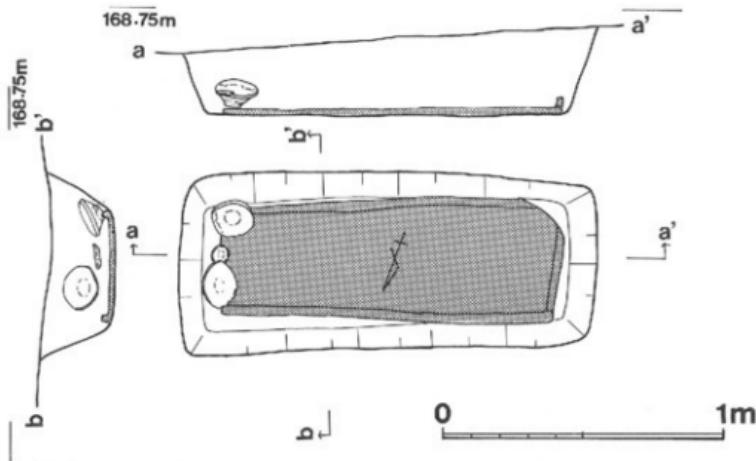


fig.392 第2トレンチS T 01平面・立面図



fig.393  
第2トレンチS T 01  
遺物・棺材出土状況

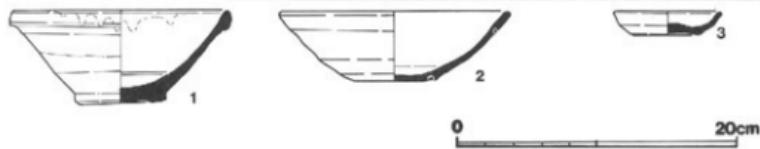


fig.394 第2トレンチS T 01出土遺物 1:白磁 2・3:須恵器

## S B01

S B01は近世初頭の堅穴状建物址である。形状は南北3.5m、東西推定3.9m、深さ15cmを測り、隅円方形である。東辺と南北辺の一部は削平されている。西辺と南北辺の一部に周壁溝を巡らし、その周壁溝の内側には小ビットが巡る。西辺の中央に、外から内に向かってのスロープ状の張り出し部がある。この張り出し部はよくしまっており、この部分だけ周壁溝・小ビットが途切れることから入口と思われる。主柱穴は4基である。遺物は柱穴内から伊万里青磁の三足皿が出土している。この堅穴状建物址は住居として使っていたかどうかは明らかでない。

## S X02

S X02は元々東西6.8m、南北4.7mであったもの(S X02-1)を、回りを埋めて東西4.6m、南北4.0mに縮小したもの(S X02-2)でどちらも深さ約0.5mを測る。S X02-2の底は平らで、壁はほぼ垂直に立ち上がり S X02-1を埋めた部分の壁は灰色粘土を使っている。

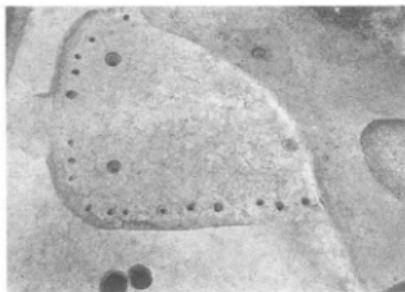


fig.395 SB01発掘状況

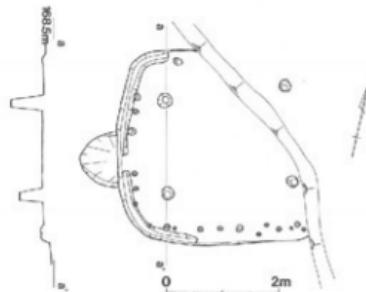


fig.396 第2トレンチSB01平面・断面図

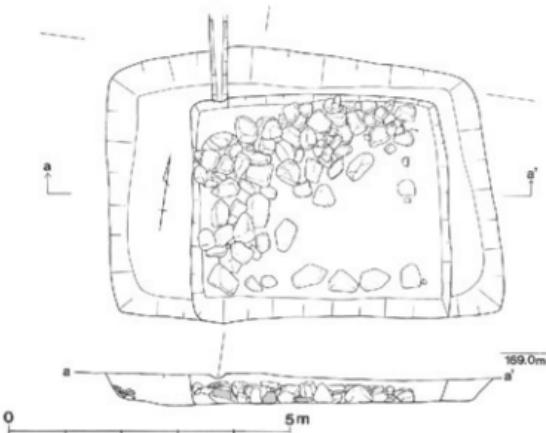


fig.397

第2トレンチSX02

平面・立面図

S X02-2の中には拳大から一抱えほどある石が多数入っていた。石材は花崗岩と凝灰質砂岩がほとんどで、珪化木も若干入っている。また、この中には花崗岩製の石臼片2個が含まれる。これらの石は、南側では1列に並んでいるが、西と北側は、乱雑に置かれている。埋土の状態は1度に埋めたようである。

S X02-1の西辺には拳大の石が集積されていた。これはS X02-1を埋めてS X02-2を造る時に埋めたものと思われる。S X02-1の底には若干の窪みがあり、そこには水が溜まっていたようで、葉等の有機物が堆積していた。

遺物はS X02-2の底から唐津焼の碗、木製の櫛、埋土中から土師器の皿、瀬戸・美濃焼の小皿が、S X02-1からは初期伊万里焼の皿、丹波焼の搗鉢・壺、漆塗りの木製椀が出土している。



fig.398  
第2 トレンチ S X02  
石材出土状況

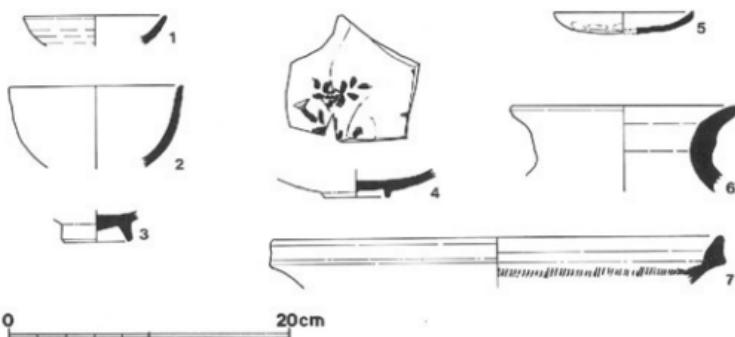


fig.399 S X02出土遺物 1～3・5：S X02-2 6・7：S X02-1

1：瀬戸・美濃 2・3：唐津 4：伊万里染付 6・7：丹波

S K 03 S K 03は埋甕土坑で、胴径45cm、高さ50cm、2.5升入りの丹波焼の甕が埋められていた。

S K 04～ S K 04～S K 06は直径2.2m～2.0mの埋桶土坑で、S K 05をS K 04とS K 06が切っている。S K 05と06には桶の部材が少し残っていた。

S K 07 S K 07も直径1.2mの埋桶土坑で桶は底板と側板の下半が残っていた。中から唐津焼の碗、初期伊万里焼の碗・白磁小皿、丹波焼の擂鉢が出土した。以上S B 01, S X 02, S K 03～S K 07の近世の遺構は出土遺物から17世紀前半の遺構と考えられる。

(3)第3・4トレンチ 第3, 4トレンチでは溝2条とビット数個が検出された。溝S D 01は幅75cm、深さ10cmで南東から北西方向に流れている。溝の両側には小ビットが並んでおり、土留めがされていたようである。この溝は昭和63年度調査の第7, 8トレンチで続きが検出されており、今年度調査の第2トレンチS D 01に続くと考えられる。

(4)第6トレンチ 第6トレンチの南側1/2は、昭和初期に開墾した時に削平されており、遺構、遺物は全く出土しなかった。北半では近世の第1遺構面と中世前期の第2遺構面が存在した。



fig. 400 第6トレンチSB 01・02  
(東から)



fig. 401 第6トレンチ平面図

## 第1遺構面

第1遺構面では埋壟土坑と土坑が検出された。埋壟土坑は上端径40cm、下端径25cm、深さ40cmの掘形に口徑26cm、胴径33cm、高さ32cmの丹波焼の壺が埋めてあった。同様の例から考えると墓址の可能性が高い。時期は18世紀後半と考えられる。

## 第2遺構面

第2遺構面では、掘立柱建物址2棟と溝などが検出された。

## S B01

S B01は、2間以上×2間以上(4.8m以上×5.4m以上)の掘立柱建物址である。建物の北西側は調査区外に出ているため全体の規模は判らない。

## S B02

S B02は1間×2間以上(2.7m×3.6m以上)の掘立柱建物址である。建物の東側は、削平されている為全体の規模は判らない。

遺物包含層以外から遺物が出土したのはS D02から須恵器の壺が2個出土しただけである。それらの遺物から第2遺構面の遺構は、12世紀後半から13世紀にかけてのものと考えられる。

## (5)第7トレンチ

第7トレンチでは、掘立柱建物址1棟の他、溝や土坑等が検出された。

## S B01

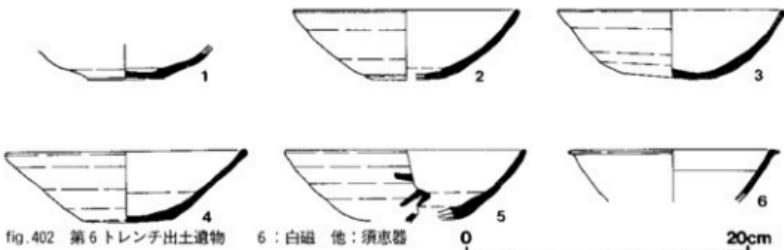
S B01はトレンチに並列して柱穴が一列検出されたため、一部拡張して建物の大きさの確認につとめた。その結果南北4間、東西2間以上(8.6m×4.4m以上)の掘立柱建物址であることが確認できた。遺物は柱穴の中から9世紀の縁釉壺の底部片が1点、須恵器の壺の細片が数点出土している。これらの遺物から建物址の時期は9世紀と考えられる。

## S D01

S D01は幅5.8m、深さ1.8mの断面がV字形に近い形態をとる溝で、トレンチに直交して検出された。この溝は昭和62年度調査の第15トレンチS D18や「五十戸口」と書かれた墨書き土器を出した第9トレンチS D01に続くものと考えられる。遺物は8~10世紀代の須恵器壺・壺が出土している。埋土の上層には13世紀頃の遺物を含み、この頃に溝としての機能を持たなくなつたようである。

## S X01

S X01は深さ1.04m、直径2.5mの土坑状の遺構で、水溜めに利用されたものと考えられ、S D01を切っている。時期は13世紀末~14世紀であろう。



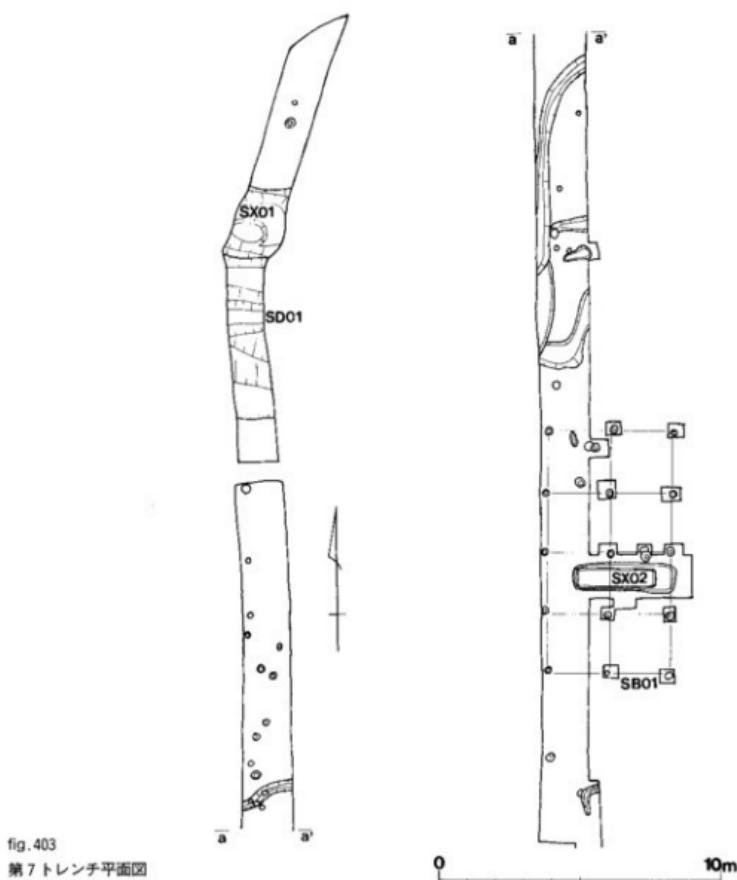


fig.403

第7トレンチ平面図

S X 02

S X 02は長方形を呈する土坑状遺構で、東西3.6m、南北0.9mの掘形の中に土質の違う東西2.8m、南北0.7mのひとまわり小さい土坑が確認された。検出時は木棺墓と考えていたが、これまで豊浦地区において検出されたいくつかの木棺墓の規模や遺物の出土状況を比べると形態が違うため木棺墓でない可能性もあり、今後の検討を要するため今のところ用途不明土坑としておく。

遺物は包含層が落ち込んだと思われる堆積土中から須恵器・土師器の小片が出ているのみである。S B01の柱穴と重なる事もなく、軸方向も同方向であることからして S B01の付属施設あるいは、さほど時間的隔たりの

ない時期の遺構であると考えられる。

(8)第8トレンチ 第8トレンチはトレンチの西側約2/3が近世以降の水田造成により削平されており、遺構は検出されなかった。トレンチの東側約1/3の所では溝2条とピット1基のみを確認できただけである。遺物包含層出土土器から12世紀～14世紀の遺構であろう。

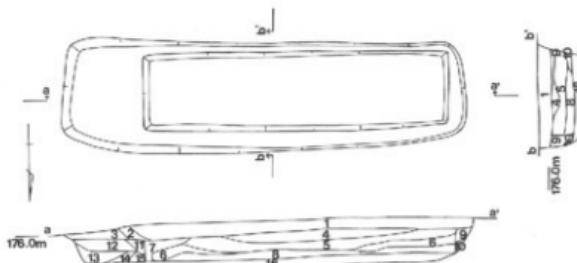


fig. 404  
第7トレンチ S X 02  
平面・断面図

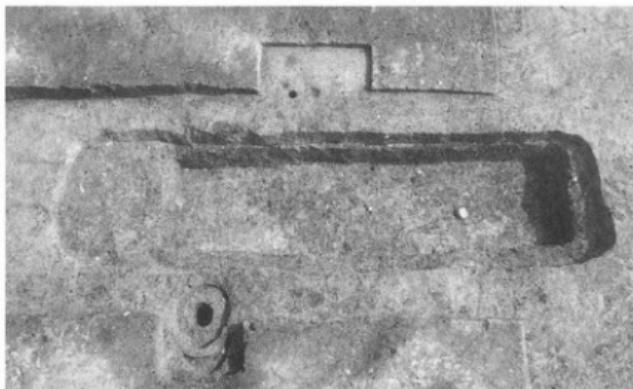


fig. 405  
第7トレンチ  
S X 02 (北から)



fig. 406  
第8トレンチ平面図

(7) 第9トレンチ  
A地区  
SD05 第9トレンチは第7トレンチに続く調査区で、鍵状に屈曲するため便宜上トレンチを第7トレンチに接する方からC地区・B地区・A地区に分けた。A地区はトレンチの約2/3が大溝である。この大溝SD05は昭和62年度調査の第15トレンチSD01に続くもので、東西に流れる大溝の北側肩部をトレンチがかすめるような形となっている。

このSD05から出土の遺物は多く、須恵器の壺・壺蓋・塊・小皿・片口鉢や土師器の塊・鍋・背磁・白磁の碗等が出土している。また「山代」と書かれた壺身や、須恵器の壺の中には「有田」「口女」等の文字が書かれた墨書き土器が出土している。その他に漆を塗った布片が出土しており、これは類例等から「エボシ」である可能性がある。

出土土器からみて、SD05は8世紀中頃以降溝として機能し、13世紀前半頃には埋没したと考えられる。また、SD05に先行する形で南から北に流れる奈良時代の溝(SD08)が確認された。

B・C地区 B・C地区では溝が4条のみ検出できた。SD01・02・03については幅が0.6mから1.3mの間におさまる溝で、どれも西南から北東方向へむけて流れているようである。時期は13世紀頃と考えられる。

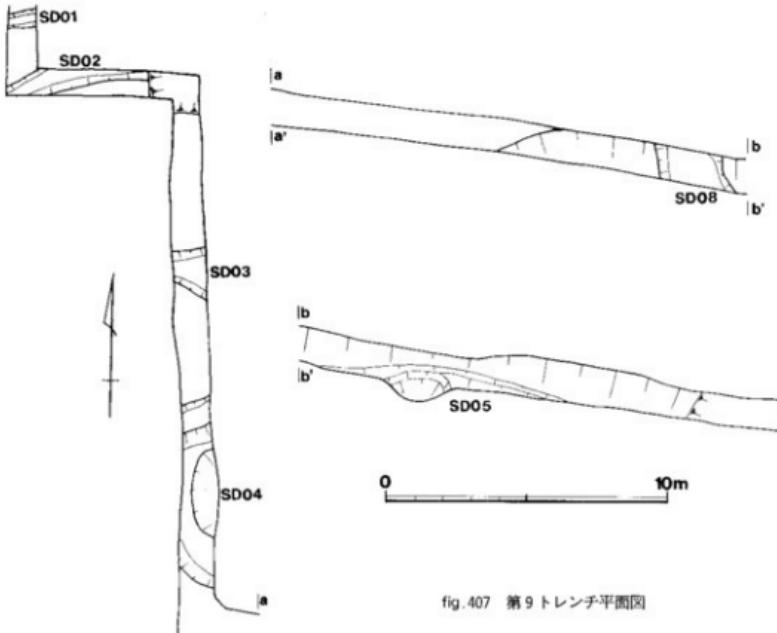


fig. 407 第9トレンチ平面図

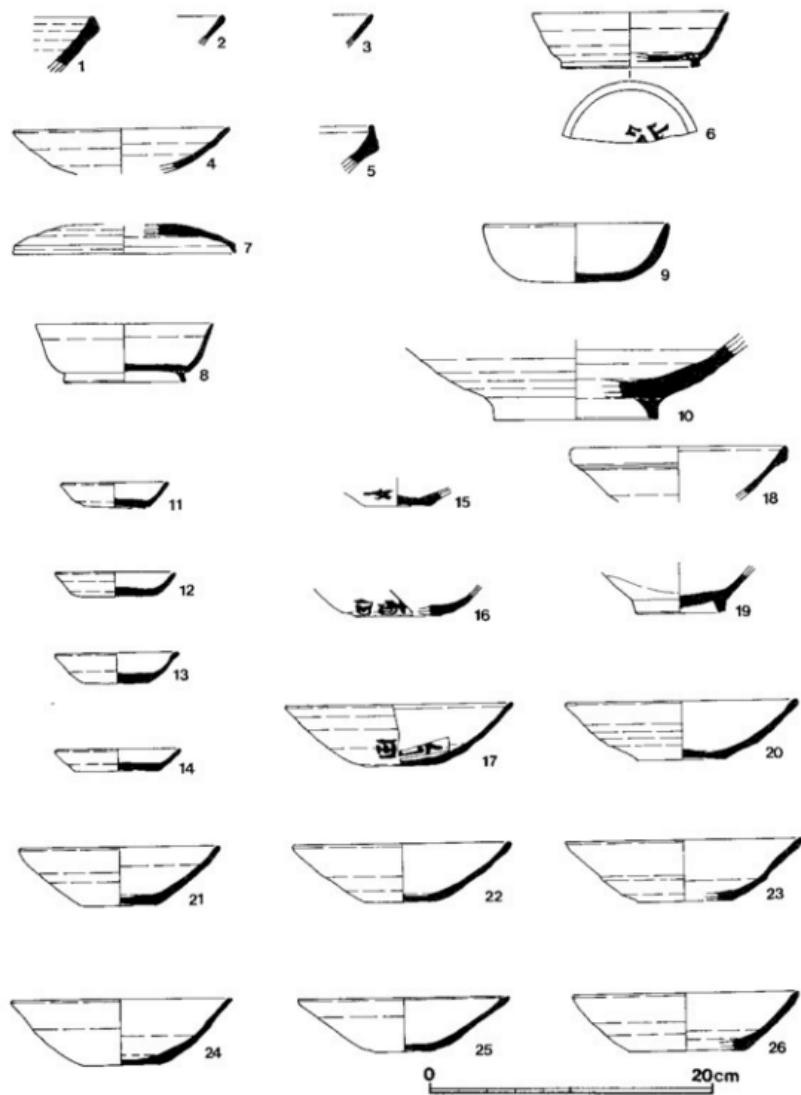


fig.408 第9トレンチ出土遺物 1 : S D02 2~3 : S D03 4, 5 : S D04 6~26 : S D05

S D 02は幅1.3mの溝でトレンチとほぼ並列して検出された。S D 03は幅0.2mの小溝である。時期は不明である。

S D 04はS D 01・02・03と方向及び規模も異なり、溝となり得るか疑問が残る。

(B)第10トレンチ

第10トレンチからは溝3条、土坑1基を検出した。S D 01は第9トレンチで検出したS D 05の続きと考えられる。工事影響レベルまでの調査にとどめ、一部の断ち割り調査を行った。

出土遺物は須恵器の壺・塊、白磁碗、瓦器塊、片口鉢等が出土しており、これらの遺物から8世紀代～13世紀代にかけて機能していた溝と考えられる。

(C)第11トレンチ

第11トレンチは、第10トレンチに続く調査区で、A地区とB地区とに分けて調査を行った。A地区からはビット15基、溝3条、不明遺構1基を検出した。B地区は丘陵裾部付近に位置し、近世以降のビットが数基存在したのみであった。遺構からの遺物の出土がないため時期については不明であるが、遺物包含層出土土器には8世紀から13世紀頃の土器が含まれており、この時期の遺構であることは間違いない。

(D)第12トレンチ

第12トレンチは溜池内に設定した調査区であるが、池底は岩盤以下まで掘削されており、堤盛土内からは近世の遺物が出土しているため、池は近世以降に作られたものと思われる。

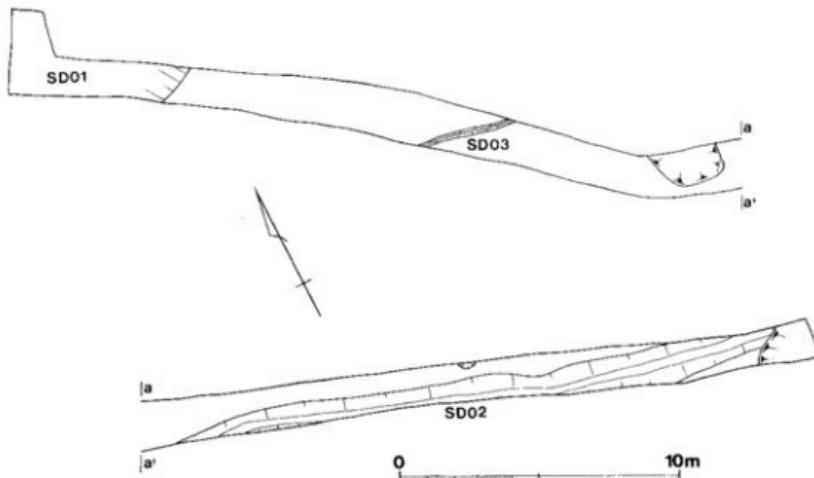


fig.409 第10トレンチ平面図

堤盛土下には遺物包含層が残っており、12世紀～13世紀頃の須恵器片や土師器片が出土し、地山面でピット7基を検出した。また、ピットの中から室町時代の丹波焼の甕片1点も出土していることから、鎌倉時代～室町時代の遺構であろう。

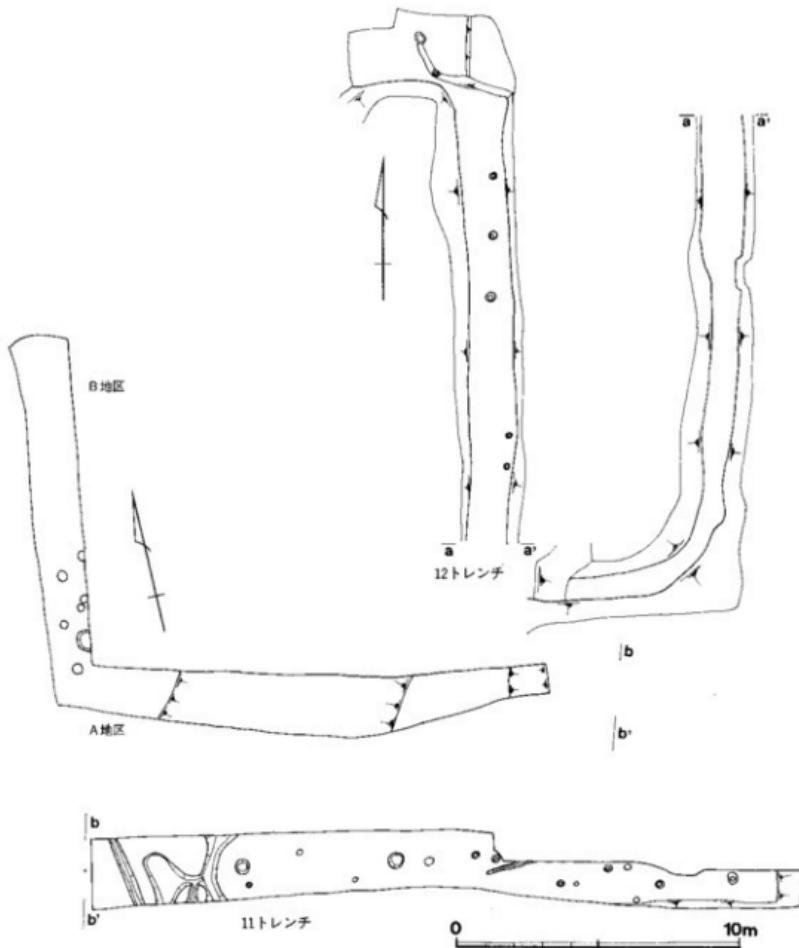


fig.410 第11・第12トレンチ平面図



fig. 411  
第11トレンチ  
A地区全景  
(西から)

### 3. まとめ

今回の調査では、宅原遺跡豊浦地区の西半分を調査したことになる。

これまでの豊浦地区の調査では、古墳時代後期の堅穴住居址は見つかっていたが、今回の調査では、もう一時期古い古墳時代中期の住居址が見つかった。

また、これまでの調査で奈良時代～平安時代初頭にかけての郷衙の跡と思われる建物跡や遺物が見つかっているが、今回の調査ではこの時期のものは見つからず、一時期新しい平安時代中期の遺物が出土している。

さらに、以前の調査において検出された、8世紀代～13世紀代に機能していたと思われる大溝の続きを確認することができ、豊浦地区を流れていった流路を推定することが可能となった。

鎌倉時代の遺構としては、木棺墓が1基見つかっている。これまで宅原遺跡内では8基の中世墓が見つかっており、今回発見されたのと合わせて、当時の墓制を知るうえで貴重な史料となる。

室町時代から戦国時代にかけては宅原遺跡内ではあまり遺構、遺物が知られていないかったが、今回の調査では遺構や多くの遺物が出土しており、宅原遺跡で空白だった時代を埋めることができた。

また第2トレンチS B01は、県下でも初めて発見された近世の堅穴状建物址である。このような遺構は長野県以東では中世後期から近世にかけてしばしば見受けられるが、関西では類例が少なくどのような性格のものか今後の検討を要する。

以上のように今回の調査では古墳時代から近世までの遺構、遺物が確認された。宅原遺跡はこれまでの調査と合わせ、弥生時代後期から現代に至るまでの集落の変遷が窺える貴重な遺跡である。

### 33. 下上津遺跡（神子田地区）、宅原・上津条里遺構

1. はじめに

昭和58年より北区長尾町において、県営圃場整備事業が開始され、それに伴う埋蔵文化財の発掘調査を同年より開始し、現在に至っている。今年度は、長尾町宅原・下上津地区内で、水田造成、排水路掘削、パイプライン埋設によって遺物包含層及び遺構面の削られる部分の発掘調査を行った。

また、下上津の字細ヲザ、丁田付近では方向の違う宅原条里と上津条里的変換点があり、また現水田畦畔に条里遺構が顕著に残っているため、下層に条里水田遺構が存在するかどうかの確認調査を行った。また、第3グリッドについては、下水幹線川整坑設置に伴う調査を実施した。

なお、遺跡名は下上津遺跡神子田地区とし、条里遺構については宅原・上津条里遺構とする。

神子田地区は丘陵に挟まれた狭隘な地を長尾川が東進する沖積地にあり、今回の調査地は長尾川に近接した旧氾濫原に位置する。

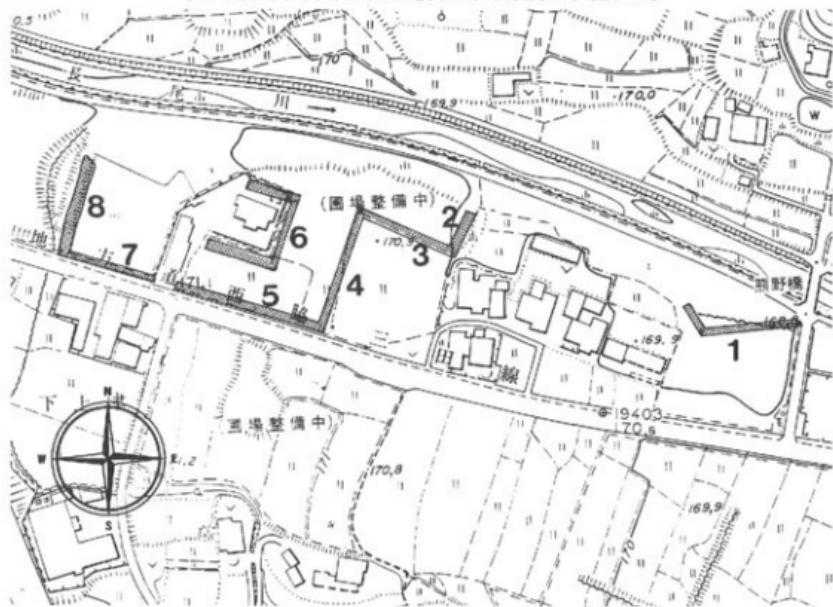


fig. 412 調査地位置図 S = 1 : 2500

## 2. 調査の概要

### (1) 下上津遺跡

神子田地区

第1トレンチ

第1トレンチは現水田の境界にトレンチが通るため、隣接する水田との高低差があり、トレンチのほぼ北側半分は盛土が厚く、工事影響レベルが盛土内でおさまった。

盛土内でおさまらない部分については、包含層の掘削と遺構検出を行った。出土遺物は少なく、トレンチの西端部において水田畦畔を確認したのみであった。またその付近では、牛と思われる偶蹄目動物の足跡が多数存在し、水田面と考えられる。水田面直上から出土した羽釜片から15世紀～16世紀頃の水田であると考えられる。

第2～5

トレンチ

第2トレンチからはピット1基と溝1条のみが検出された。第3トレンチからはピット6基と溝1条、土坑1基を検出した。第4トレンチは遺構は無く、第5トレンチからはピット3基を検出した。

包含層からは奈良時代及び13世紀～14世紀頃の須恵器・土師器等が出土している。特に第3トレンチと第4トレンチの交点付近からの出土は多く、この付近に建物址等の遺構の存在が考えられる。

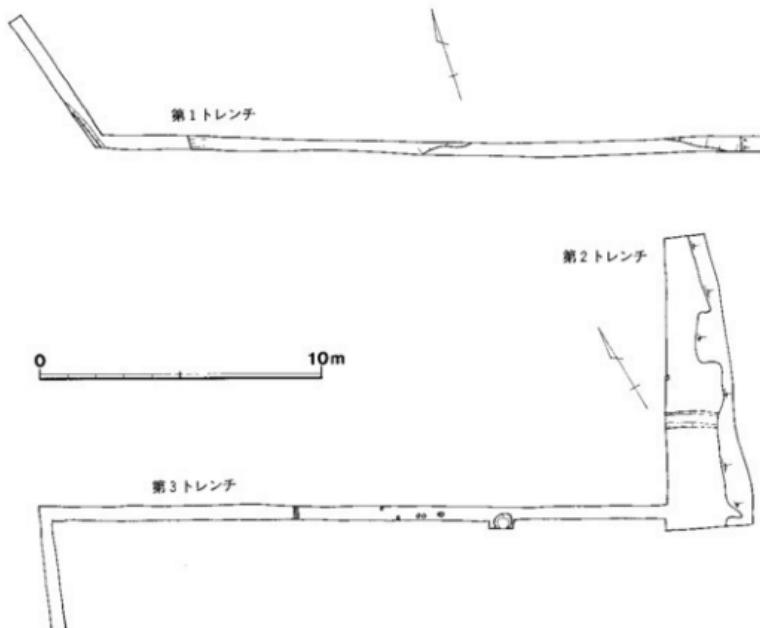


fig.413 第1・第2・第3トレンチ平面図

## 第6トレンチ

第6トレンチからは、奈良時代の溝1条、ピット、平安時代末から鎌倉時代の溝2条、土坑3基、柵列1列、ピット、近世の溝1条を検出した。

S D04は幅0.3～0.4m、深さ0.2mの南北に流れる奈良時代の溝で、埋土中から須恵器の坏身が出土している。この他、奈良時代の遺構としてはピットが確認されている。

S D02,03は中世前期の溝で、調査区外で交わると思われる。このS D02,03の北東側では、遺構が密集することからこの溝は屋敷地等を区画する溝と考えられる。S A01はほぼ南北方向の柵列で、S D03とほぼ並行する。柱穴は3間分確認され、柱穴間の距離は2.2m, 2.0m, 2.9mとまちまちである。柱穴内から須恵器の壇、土師器の小皿が出土している。須恵器には墨書きされたもの（文字不明）が含まれる。このS A01が掘立柱建物址の可能性もあったため、確認のトレンチを3本入れたが対応する柱穴は確認されなかった。しかしこの確認トレンチ内のS P21からは完形品の須恵器壇を含む須恵器・土師器・白磁などが出土した。これは地鎮に関する遺構と考えられ、この付近に掘立柱建物址があるものと思われる。時期は11世紀末から12世紀初頭と考えられる。

S D01は近世の溝で上津条里水田の1坪の境の溝と思われる。溝の底からは牛の足跡が多く検出された。

第7、8トレンチは旧谷地形の中にあたり、第7トレンチでは現耕土下、第8トレンチでは近世耕土層下で、黄褐色～青灰色の粗砂～粘土が堆積しており遺物・遺構は確認されなかった。



fig.414

第6トレンチ全景  
(北から)

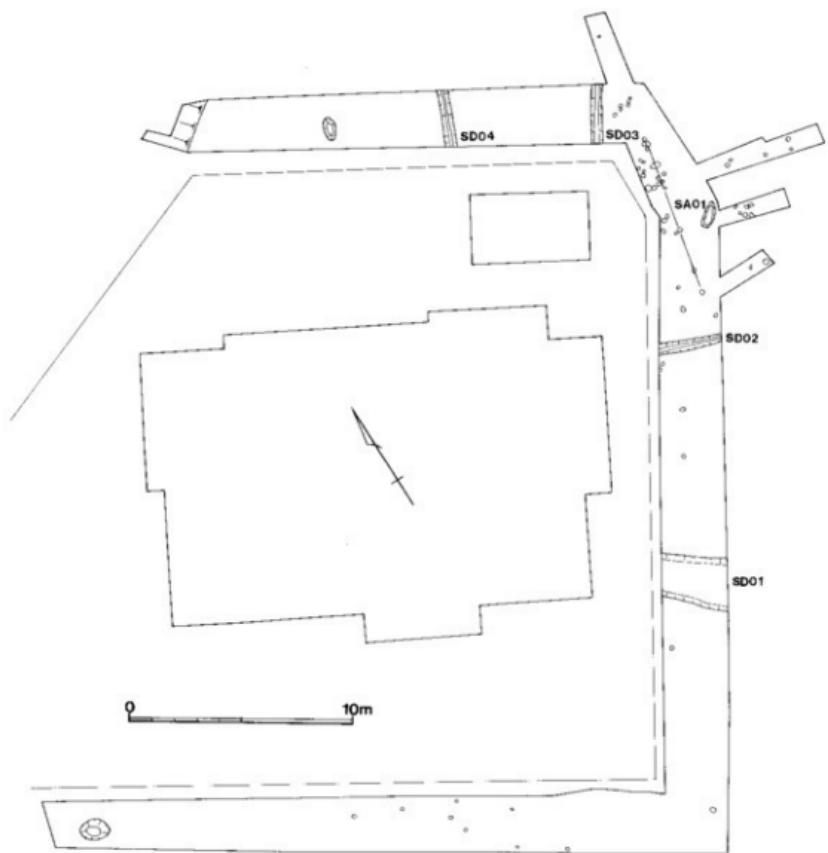


fig.415 第6トレンチ平面図

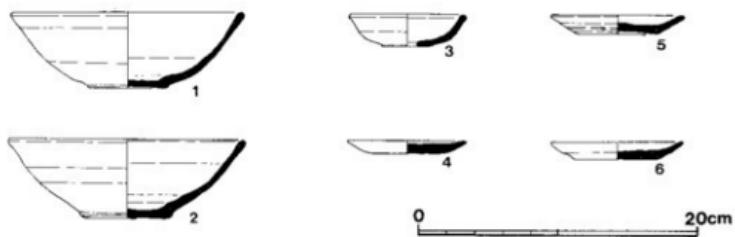


fig.416 第6トレンチ出土土器 1～3：須恵器 4～6：土師器

宅原・上津  
条里遺構

遺跡は大阪湾へ流れ込む武庫川の一支流である長尾川右岸の沖積地に位置し、現在は水田として利用されている。

現水田畦畔が推定条里の地割りと合致してくるため、現水田下に埋没水田が存在するかどうかの確認のため試掘調査を行った。

調査対象地に5本のトレンチと3ヵ所のグリッドを設定し、現水田の下層に埋没水田及び畦畔の有無を確認した。その結果、トレンチ断面及びグリッド断面における土層観察により、水田層と思われる数枚の土層が確認された。

また、立命館大学非常勤講師・高橋学氏に御指導いただき、地理学的分野から水田耕土層の確認、遺跡の立地等に関して新たな知見を得た。

第1グリッド断面において1a層～8b層に分層でき、2a・3a・4a・5a層には、現水田畦畔（1a層）の下層に水田土壤及び畦畔を確認できたが、6a・7a・8a層については、水田土壤の可能性はあるものの畦畔を確認することはできなかった。

第1トレンチから第5トレンチにおける断面土層観察においても第1グリッドの土層とほぼ同じ結果であった。現水田畦畔の下層には全て、埋没水田の畦畔が確認される結果となった。

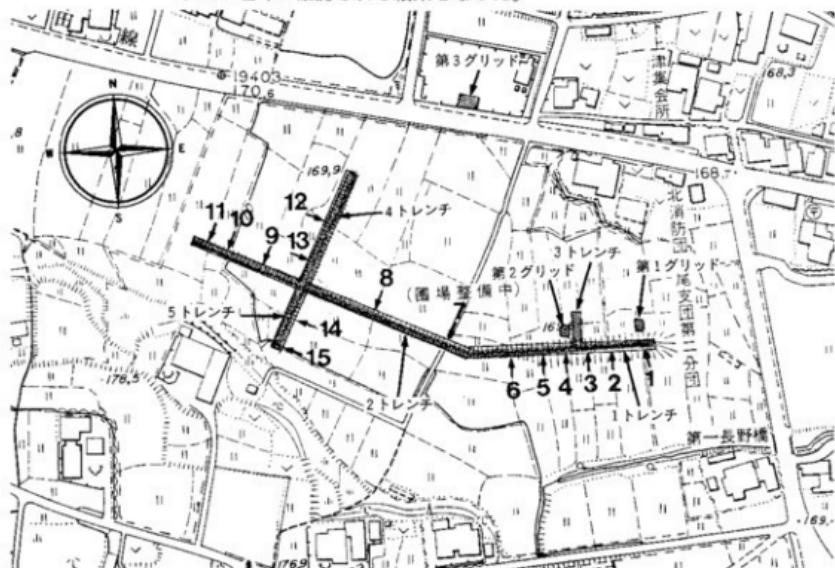
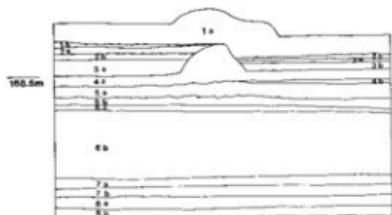


fig.417 宅原・上津条里トレンチ・グリッド設定図 S = 1 : 2500 (番号は畦畔番号、方位は方北北)



第1グリッド (S = 1 : 100)

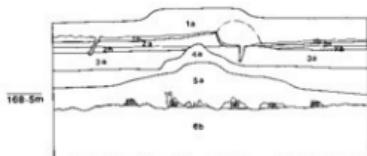


3 トレンチ壁面

(S = 縦 1 : 50、横 1 : 100)

#### 土層断面図 土層名

- 1 a. 現耕土
- 1 b. 現木床
- 2 a. 黄灰色シルト質細砂
- 2 b. 明黄褐色シルト質細砂 酸化鉄
- 3 a. 黄灰色シルト質細砂
- 3 b. 明黄褐色シルト質細砂
- 4 a. 灰白色シルト質細砂
- 4 b. 灰褐色シルト質細砂
- 5 a. 灰褐色シルト
- 5 b. 灰白色シルト
- 6 a. 黄灰色シルト
- 6 b. 灰黄色シルト質中砂
- 7 a. 灰色シルト質細砂
- 7 b. 灰白色シルト質細砂
- 8 a. 灰色シルト質細砂
- 8 b. 灰白色シルト質細砂
- 9 a. 喀黒褐色シルト 蔑化物
- 10 b. 灰褐色細砂～粗砂
- 11 b. 灰褐色細砂質シルト



第2グリッド (S = 1 : 100)

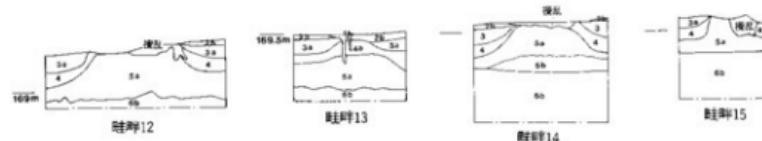
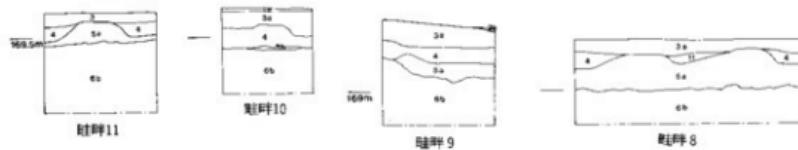
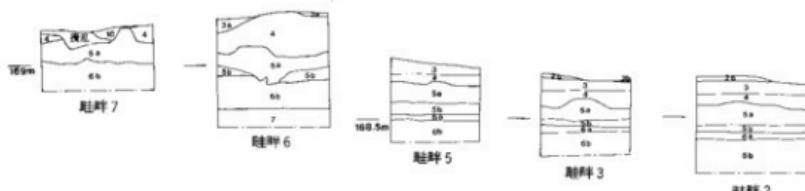


fig.418 宅原・上津条里造構確認調査土層断面図 (S = 縦 1 : 50、横 1 : 100)

水田面の時期は少ない出土遺物から検討した結果、1層が現水田面、2層・3層は近世以降、4層は鎌倉時代～室町時代頃、5層は平安時代～奈良時代頃と考えられる。6層・7層・8層については時期不明である。

以上の試掘調査の結果から、現地形で条里遺構がみいだせる宅原・上津地区は現水田下層においても同位置に古代の水田畦畔が存在し、奈良時代以降連続と水田としての土地利用がなされていたものと考えられる。

また、水田土壤の可能性はあるものの、畦畔を確認できなかつた6a・7a・8a層については、自然科学的分野から水田としての土地利用があつたかどうかをプラントオパール分析法により検証中である。

さらに、第2グリッドにおいて1a層から8層までの良好な資料が得られたため、グリッド断面の土層の剥ぎ取りを行つた。

第3グリッドは10m×6mの調査区で、南端約1mは道路築造時に影響を受け、文化財は確認できなかつた。

基本層序は、現耕作土層、旧耕作土層3面、黄褐色粘質土層、黄色粘土層である。旧耕作土層のうち、畦畔が確認できたのは、最下層の水田のみである。

上層の遺構面は、現在の耕土直下で検出され、N65°Wの方向に流れる溝が1条確認された。埋土からは、鎌倉時代から近世に至る遺物が出土した。調査区に南接する県道西脇三田線築造時まで使用されていたと考えられる。下層の遺構面では、水田および畦、溝を検出した。

水田は3面検出された。水田面の標高は、南側が169.6m、北側が169.3mを測る。水田の時期は、出土遺物が少なく明確ではない。しかし、耕土中より奈良時代の遺物が出土しており、他の時代の遺物を含まないことから、当時期の水田である可能性がある。

畦はN55°Wの方向に走り、調査区西側にある集落内の私道の延長線上に位置し、推定される条里の方向と一致する。基底幅2.8m、高さ50cmを測る。規模及び立地より、条里水田1町境の大畦畔であると考えられる。

S D01は、大畦畔上に造られた溝である。近代の溝によってかなり削られているが、幅80cm以内、深さ約20cmの規模が復元できる。

調査区西側で水口が検出された。幅約50cm、深さ約10cmを測る。近代の溝の影響を受け、検出状況では、溝と水田面の標高差を明確にできない。しかし、周囲の状況から判断すると、S D01から南側の水田区画へ水を導く入水口であると考えられる。

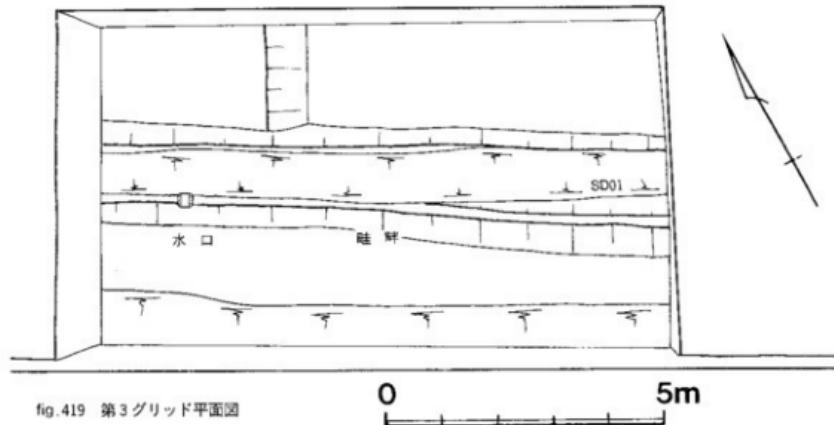


fig. 419 第3グリッド平面図

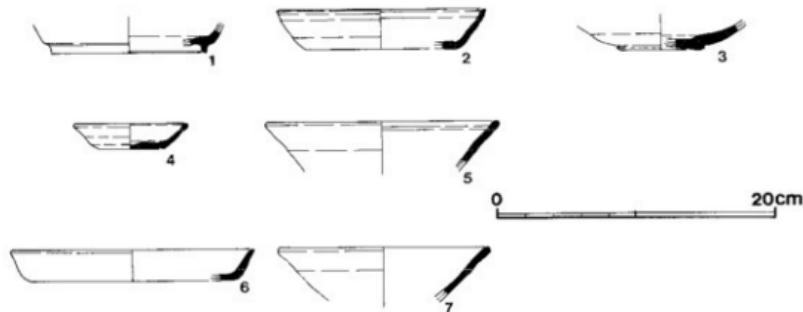


fig. 420 宅原・上津条里出土土器 1：1トレンチ 2～5：2トレンチ 6・7：4トレンチ

### 3.まとめ

下上津遺跡  
神子田地区

宅原・上津  
条里遺構

下上津遺跡神子田地区は長尾川に近接する地区であり、調査地区の中には谷地形により遺構・遺物の存在が認められなかつた地区もあつたが、第6トレンチでは丸形の須恵器壺を出土したピットが検出されたことや、遺物を多く含む包含層のあることから、今回の調査では確認はできなかつたが、付近に掘立柱建物址の存在が考えられる。

条里遺構の認証調査においては、現水田畦畔の下層には全て埋没水田の畦畔及び水田土壤を確認することができた。また、現水田畦畔のない所には埋没水田の畦畔も無く、古代より同じ地割りの下に水田経営がなされてゐたものと考えられる。

条里遺構の調査は、まだ緒についたばかりであり今後、条里制・莊園制を考える上で考古学的アプローチがさらに必要となつてくるであろう。

### 34. 宅原遺跡（内垣地区）

#### 1. はじめに

宅原遺跡は、長尾川によって形成された沖積地及びその右岸の南北に伸びる丘陵先端部に位置している。昭和58年以来、圃場整備事業や北神中央線等の道路建設に伴う発掘調査が継続的に実施されている。その調査結果から縄文時代から江戸時代に至る複合遺跡であることが明らかにされた。

今回の調査は、北神中央線の建設に伴うもので、昭和61年度に発掘調査が実施された内垣地区調査地の北側に続く地点にあたる。昭和61年度の調査では、弥生時代後期の竪穴住居址3棟をはじめ溝や土坑が検出され、時期は明らかではないが掘立柱建物址や河道等も検出された。今回の調査では、弥生時代の遺構面に至らず、上層において検出されるものに留めた。

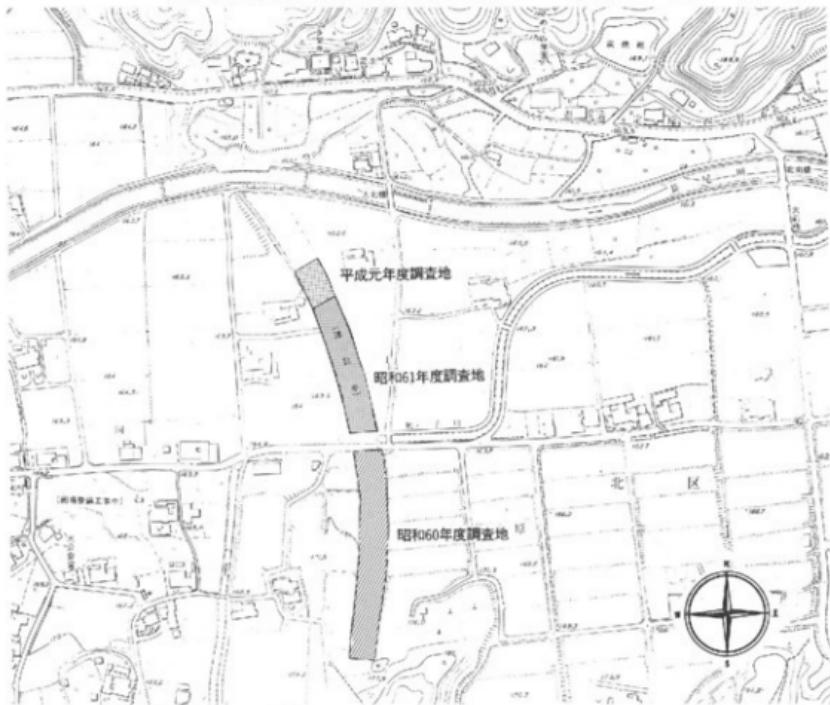


fig.421 調査位置図 S = 1 : 5000

## 2. 調査の概要

今回の調査では、中世の水田面および、ピット群、古墳時代後期から飛鳥時代に至る溝状遺構や土坑、弥生時代終末から古墳時代前期の溝状遺構等が検出された。

以下、各遺構面毎に順を追ってその概要を記述する。なお、第1遺構面の標高は、162.9m前後、第2遺構面、162.8m前後、第3遺構面は、162.5~162.7mである。

### 第1遺構面

中世の遺物包含層である厚さ0.2m程度の暗灰色土を除去したところ、中世水田面と思われる暗灰褐色土を確認した。この上面において牛足状の足跡や、人と思われる足跡が存在したが遺存度が極めて悪かった。調査区北西隅において幅0.75m、高さ0.04~0.06mの畦畔を検出することができたが、他には検出されなかった。また、この水田面は、調査区の西半にしか認められなかった。詳細な時期は明らかではないが、中世遺物包含層の出土遺物より13世紀以降の水田跡と思われる。



fig.422 調査区遠景 (北から)



fig.423 遺構完掘状況 (北から)

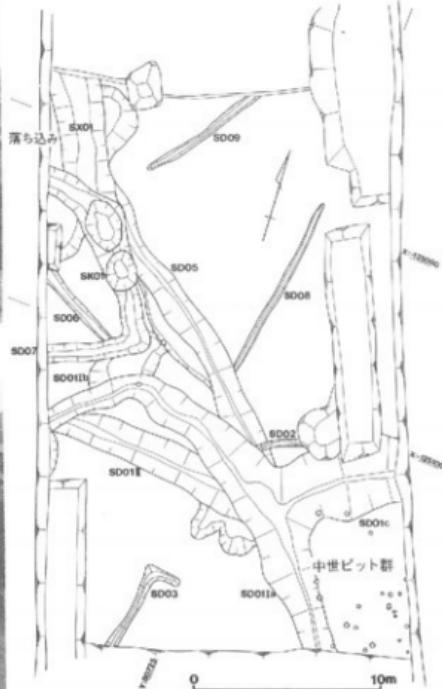


fig.424 遺構平面図

**第2遺構面** 第2遺構面の検出面である黄灰色砂質土層は、調査区南東隅にのみ確認され、その他の地点では、弥生時代遺物包含層上面で遺構が検出された。

**ピット群** この黄灰色砂質土の上面で直径0.15~0.3m、深さ0.2~0.35mのピットを12基検出した。これらの大半が、掘立柱建物址等の柱穴であることが判明したが、調査地内で建物址としてのまとまりは確認できなかった。詳細な時期を決定する遺物は出土していないが、概ね12~13世紀を前後する時期に相当するものと思われる。

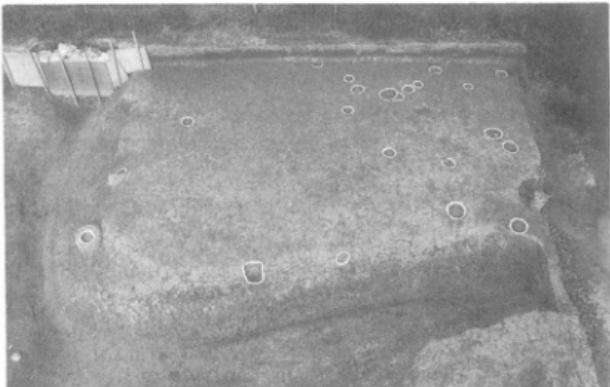


fig.425

**第2遺構面**

中世ピット群

完掘状況（西から）

**S D01**

昭和61年度の調査で検出されたS D03に相当するものと思われる溝状遺構である。中世のピット群と同一面で検出され、ピットによって切られる。

この溝は、南東から北西へ流れる溝(S D01-Ia)と西方から大きく弧を描き南東へ流れる溝(S D01-Ib)が、調査区の南東で合流し、更に東方へ流れる溝(S D01-Ic)となっている。

南東から北東へ流れる溝(S D01-Ia)、西方から南東へ流れる溝(S D01-Ib)は、共に調査区の端では、幅1.2~1.6m、深さ0.5~0.65mと狭く浅いが、両溝が合流する地点は、幅2.5m、深さ0.75mと広くまた深くなっている。これらの溝が合流し、東方へ流れる溝(S D01-Ic)は、幅3.5~4m、深さ0.8mと2本の溝よりも規模は大きい。また、3本の溝が合流する地点は溝底が広く、深さも0.8~0.9mと深くなっている。

この溝は、7世紀前半頃まで機能していたことが、出土した須恵器壊身、壺蓋より窺えるが、築造時期は6世紀後半頃と思われる。これは、もとはS D01-Ia・cとS D01-IIからなっていたものを、6世紀末~7世紀初頭頃にS D01-IIを埋め、S D01-Ibに付け替えたものと思われる。

S D01-IIは、直線的に西から東へ流れる幅2m、深さ0.65mの溝で溝

底より6世紀後半頃の須恵器坏蓋、短頸壺が出土している。

**S D03** この地点には、黄灰色砂質土が存在せず、弥生時代遺物包含層である暗褐色粘質土上面で検出された。南北に走る、幅0.3~0.7m、深さ0.1m程度の不整形な溝である。出土遺物は6世紀末頃の須恵器坏身等がある。

**S D07** 弥生時代遺物包含層である暗褐色粘質土上面で検出した。幅1.2~1.8m、深さ0.45~0.6mの断面U字形の溝状遺構である。溝は、西から東に延び、ほぼ直角に屈曲し、北西に延び、調査区域外へ出る。埋土は、灰色シルト、黄灰色シルトおよび茶灰色粘質土が互層をなしている。中層より6世紀後半頃の須恵器坏蓋が出土している。

**S K01** 弥生時代遺物包含層上面で検出され、S D07によって切られている。直径2m、深さ1.2mの円形の土坑である。土坑底よりやや浮いた状態で、



fig.426  
S D01完掘状況  
(西から)



fig.427  
S D05・07  
完掘状況  
(北から)

完形に近い須恵器甌が1点出土している。出土遺物より、6世紀後半代と思われる。

### 第3遺構面

SD 05

弥生時代遺物包含層の暗褐色粘質土上面において検出された遺構である。調査区中央を、南東から北西へ直線的に緩やかに流れる溝で、昭和61年度の調査で検出されたSD 04か、SD 05に相当する。溝の断面形は、V字形で、幅1.8m、深さ0.6~0.7mを測る。弥生時代後期から末頃の遺物が若干出土している。

SX 01

東西2.5m、南北約3m、深さ1.4mの土坑と、幅2.3m、深さ0.7mの断面U字形の南北に走る溝とからなる遺構である。土坑埋土の中層に青灰色粗砂があり、これが溝の最下層に続くことから同一遺構と考えられる。土坑は、中層から下層において青灰色の砂層があり、滯水していたことが窺えるが、土坑底からは水は湧いてこない。調査区内では、一番低い位置にあることなどから、水溜めとして使用されていた可能性が考えられる。土坑および溝内より弥生時代末頃の遺物に混じって、古墳時代前期の土師器小型丸底壺の破片が出土している。

### 落ち込み

調査区北西隅において、南北10m、東西2.5~5m、深さ0.5~0.9mの落ち込みを検出した。自然の落ち込みかと思われるが、大半が調査区域外に延びるため断定できない。下層からは、弥生後期の遺物がわずかに出土しているが、SX 01が形成される時期まで存在した可能性がある。

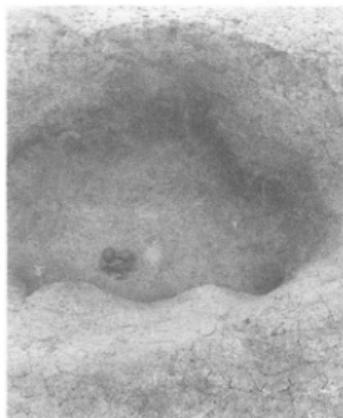


fig. 428 第2遺構面 SK 01発掘状況(東から)

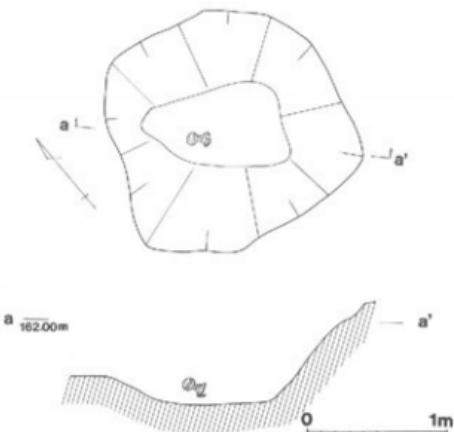


fig. 429 第2遺構面 SK 01平面・断面図

その他の  
遺構

この他にも、時期不明の溝状遺構4条、土坑2基を検出したが、出土遺物がなく、しかも、第2遺構面の黄灰色砂質土が存在しない地点のため、第3遺構面のものかどうか判断し難い。

3. まとめ

今回の調査では中世の遺構のみを予測していたが、古墳時代後半から飛鳥時代、弥生時代末頃から古墳時代前期の遺構面を3面検出することができた。中世のピット群は、調査区内では建物址としてのまとまりは確認できなかったが、調査区域外、東側に掘立柱建物址が存在する可能性がある。

また、第2遺構面の6世紀後半から7世紀前半の溝S D01は、南東から北西に傾斜する地形に逆らい、西から東に流れるように掘削されている。溝S D01は、その状況から水路の可能性が高く、付近に当時期の水田址が存在する可能性もある。

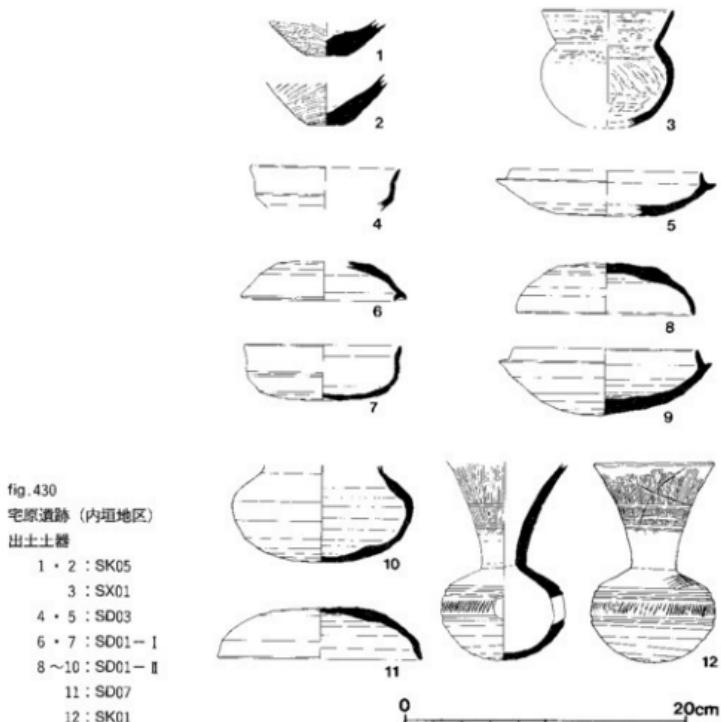


fig.430  
宅原遺跡（内堀地区）  
出土土器

- 1・2 : SK05
- 3 : SX01
- 4・5 : SD03
- 6・7 : SD01-I
- 8~10 : SD01-II
- 11 : SD07
- 12 : SK01

### 35. 北神ニュータウン内遺跡 (宅原・上天神地区)

**1. はじめに**

当調査地は、数合池の北西にある、南西から北東にのびる丘陵上の南斜面部に位置している。

昭和63年度の試掘調査で丘陵全城にわたり、トレンチを設定し調査したところ、今回の調査区で鎌倉時代と思われる須恵器小片を含む土坑等が検出された。

今回の調査は、土坑が検出された南斜面部全面の調査と、前年度試掘を実施できなかった南西に近接する約150m<sup>2</sup>ほどの畑地にテスト・ピットを設定、遺構・遺物の有無を確認した。

**2. 調査の概要**

調査の結果、南斜面部では、14基の土坑（この内、SK11, 12は昭和63年度調査済み）と小溝1条が検出された。南西近接地に設けたテスト・ピットからは、遺構・遺物共に検出されなかった。

また土坑の内で、SK07・08に関しては平面が円形で、底面も水平に作られるなど、他と共に通する特徴を有するが、内部は腐食土が底面まで落ち込むことから、かなり時期の下るものと思われる。



fig. 431 調査地位置図 S = 1 : 5000

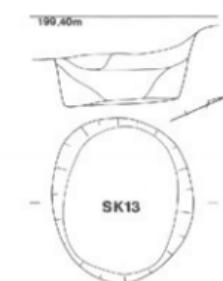
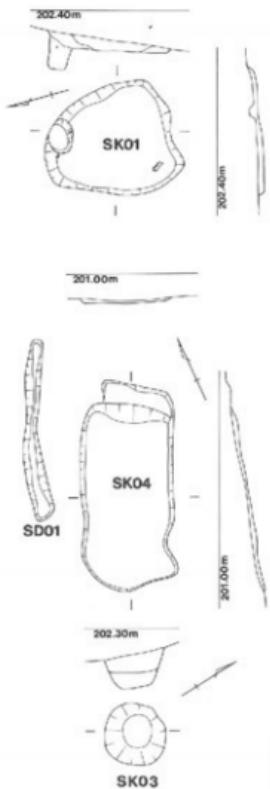


fig.432 土坑平面・断面図

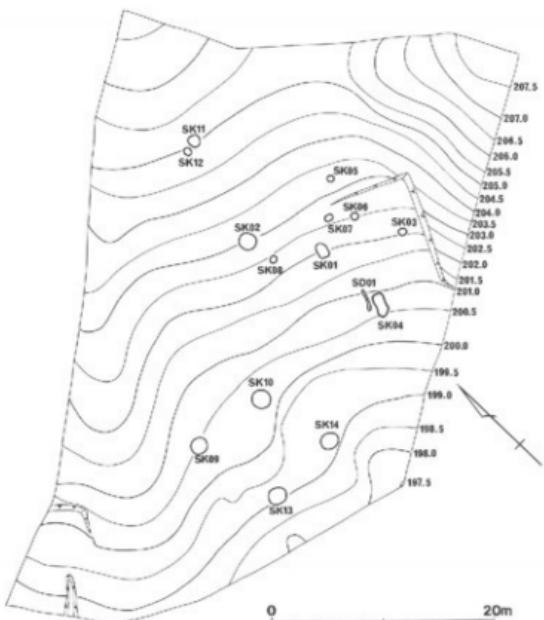


fig.433 調査地平面図



fig.434 土坑群全景（東から）

S K01 南北1.5m、東西1.2m、深さ15cmを測る不整楕円形を呈する土坑で、北端部は、径約30cm、深さ約20cmの小穴が掘りこまれている。

小穴内部と東半部には、炭・灰が堆積しており東半部の底面は熱により赤変していた。内部に堆積した炭・灰中から奈良～平安時代の須恵器片が出土した。

S K04 南北2.2m、東西1.0m、深さ5cmを測る不整長方形土坑で、埋土からS K01とほぼ同時期と思われる須恵器片が出土した。

S D01はこれに伴うものと考えられるもので、長さ1.9m、幅0.2m、深さ10cmを測る。

S K04、S D01共に炭・灰の検出はなかった。

前二者以外の土坑は、径0.6～1m程度の不整長方形～円形を呈するものと、径1.8m前後のものとの二種類に分けられる。

S K03, 05, 06, 11, 12は前者で、S K02, 09, 10, 13, 14は後者に含まれる。

S K03 径0.65m、深さ45cmを測るもので、埋土は上下二層に分れる。小型の土坑は、埋土の状態もほぼ共通している。

S K13 南北1.55m、東西1.8m、深さ80cmを測るものである。

埋土は最下層に厚さ2～5cmを測る黒色腐食土が堆積し、その上層はその周囲から中心に向かって埋められていった状況を示している。黒色腐食土は底面直上に限られ、これより上部の埋土は基本的に周囲の地山掘削土が堆積している。

各大型土坑は埋土も共通している。遺物は大型・小型の土坑からは全く検出されなかった。

今回の調査地からは、奈良～平安時代の須恵器片が、14ℓコンテナに1箱程度出土したが、前記したS K01, 04出土遺物以外はすべて流土中からの出土である。

### 3. まとめ

今回の調査地からは、計14基の土坑と溝1条が検出された。このうちS K01, 04からは奈良～平安時代の遺物が出土し、時期を推定でき、特に後者では祭祀的行為が行われたことも推定できた。ただ、これらと他の円形土坑との関係は不明で、円形土坑の性格も墓壙とも考えられるが、確定はできず、時期も出土遺物がないことから同様である。しかし、流土からは調査地北西端で出土した近世土器片を除けば、すべて奈良～平安時代に属しており、これら円形土坑をS K01, 04と同時期でないと断定することも躊躇される。

これらの問題については、類例の増加を待って、再検討を加えたい。

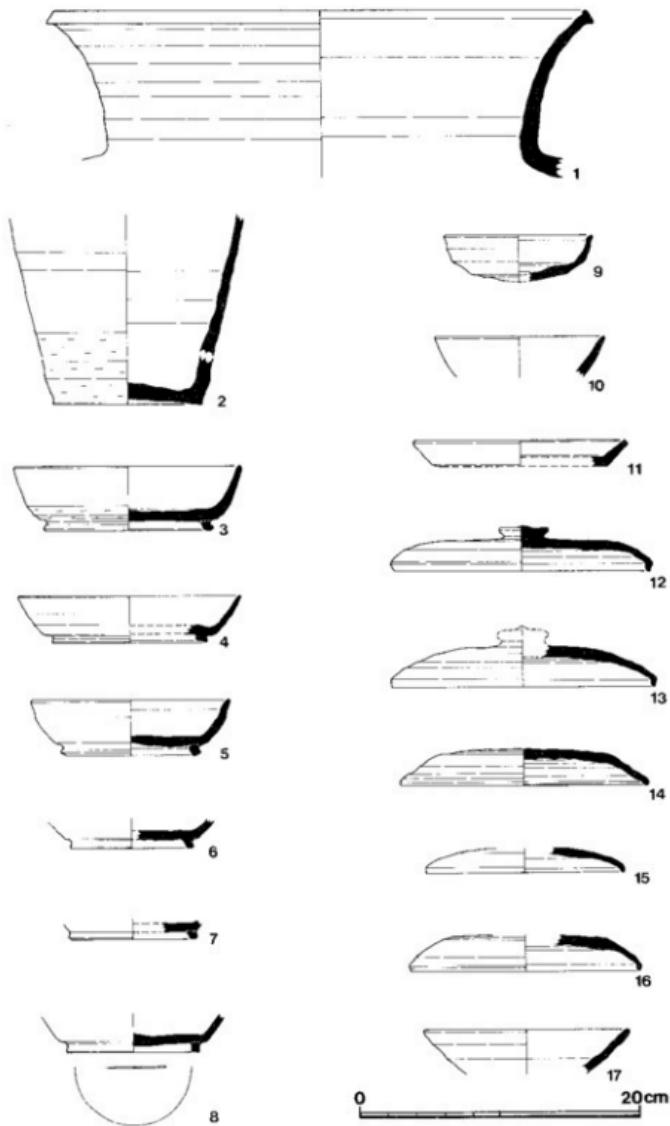


fig.435 宅原・上天神地区出土須恵器 13:SK01 出土 他:流土中出土

### 36. 上小名田遺跡

#### 1. はじめに

六甲北有料道路II期築造に伴う上小名田遺跡の調査は、昭和61年度に試掘調査を行い、62年度より発掘調査を進めてきたが、今年度調査をもって一先ず終了した。これまでの3ヵ年で、神戸市教育委員会および財團神戸市スポーツ教育公社が行った調査は、延べ19ヵ月、 $11,770\text{m}^2$ となった。

今年度の調査は、本線部分のIX区（昨年度から継続）・X区と橋梁部の側溝・擁壁部分および県道歩道設置部分にあたるXI・XII・XIII区について実施した。



fig. 436 調査地位置図 S = 1 : 5000

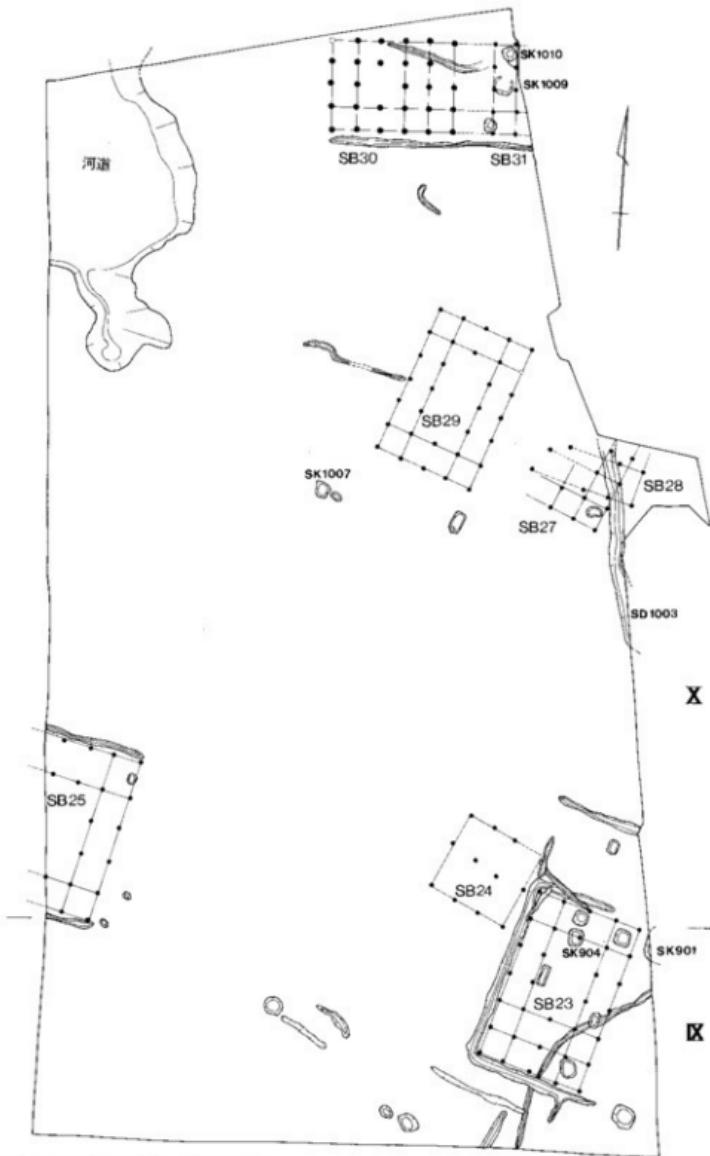


fig.437 遺構配置（模式）図 S = 1 : 500

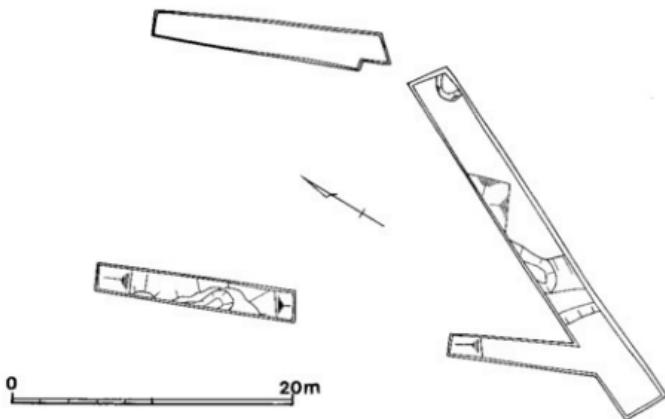


fig. 438 XI区遺構平面図

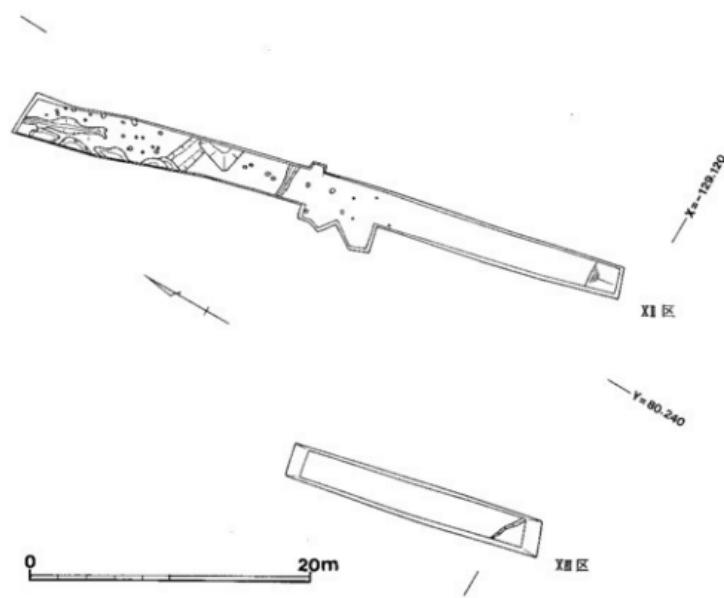


fig. 439 XII・XIII区遺構平面図



fig. 440 IX・X区全景（北から）

## 2. 調査の概要

**掘立柱建物址** 物址のほか、土坑、溝、河道などが検出された。掘立柱建物址はIX・X区で10棟検出され、XII区においても建物址の確認はできなかったが柱穴が検出されている。これまでの調査とあわせると、河道の東側において東西約90m、南北約200mの範囲に34棟以上が確認された。

### S B23

昨年度からの継続調査であるIX区で検出された南北棟の6間×4間の建物址で、東以外の三方に建物の側柱に接するように雨落ちと考えられる溝S D 901が設けられている。この溝は幅約80cm、深さ15cm前後であり、本来は四周していたと考えられるが、建物東側は比較的傾斜がきつく下がってきており、東側および北側溝の東半部は削平のために残存していないと考えられる。

柱穴の掘形は、直径30cm前後で深さは30~60cmである。これらの柱穴には、柱根の残るものもあるが、多くは建物廃棄時に柱材が抜き取られたと思われる状況であった。また、S P 914では土師器壺・壺・皿 (fig. 454:

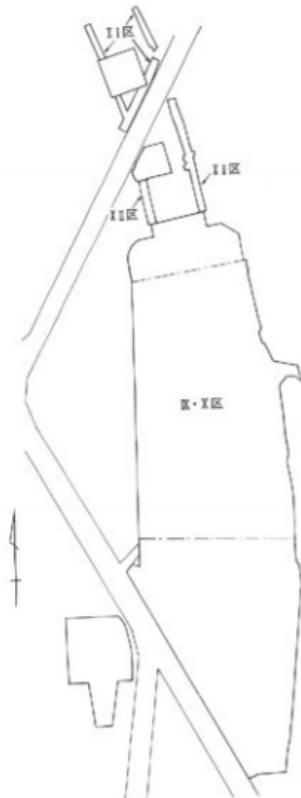


fig. 441 平成元年度調査区割図 S = 1 : 2000

5~8)、S P921では下駄が出土したように、柱抜き取り後に土器等を廃棄（埋納）したものも見られる。

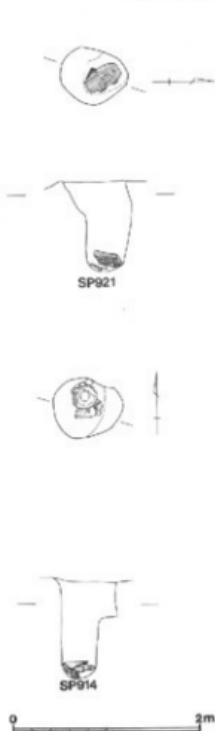


fig.442 S P914・921  
遺物出土状況図

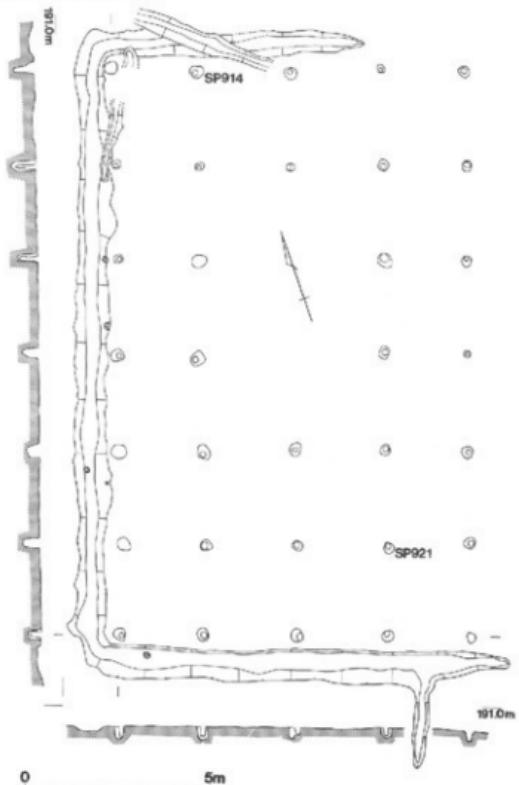


fig.443 S B23平面・柱穴断面図

fig.444  
S B23全景（南から）



S B24

3間×2間のほぼ正方形の建物址である。側柱列が通ることから建物址としたが、東西の中央列は不揃いで北東隅柱も検出されなかつた。また、柱間は、桁と梁方向では不等間である。

S B25

側通り5間×4間以上の建物址であるが、四面に廂を持つと思われ、身舎部分は3間×2間以上である。この建物址の南北側には、幅35~50cm、深さ5cm前後の浅い溝が設けられている。

S B27・28

S B27・28は重複しており、いずれも搅乱および調査地外に延びることから、規模は確定できない。S B27は3間以上×2間以上、S B28は2間以上×1間以上である。



fig. 445 S B24全景（西から）



fig. 446 S B25全景（北から）

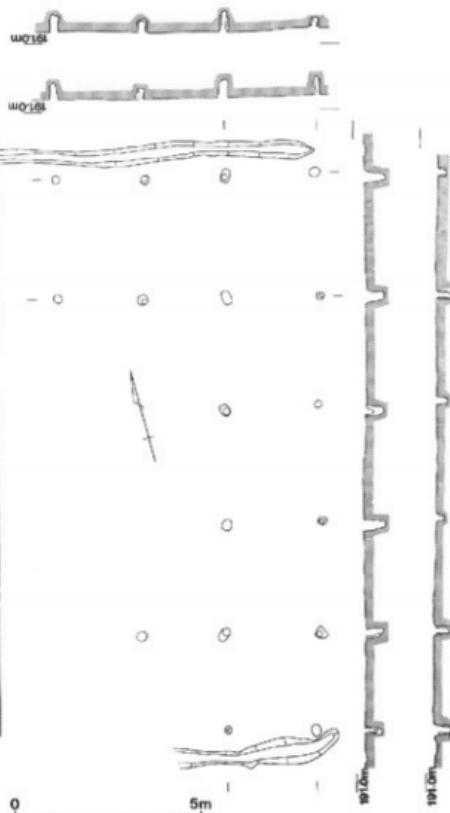


fig. 447 S B25平面・柱穴断面図



fig. 448 S B 27・28全景（南から）

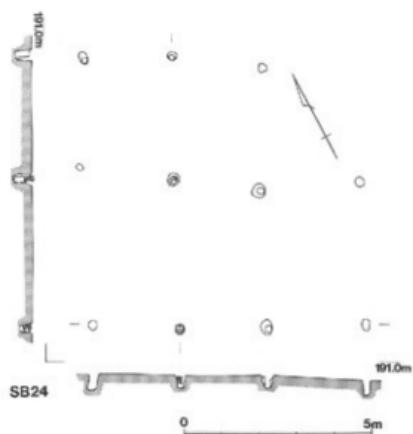
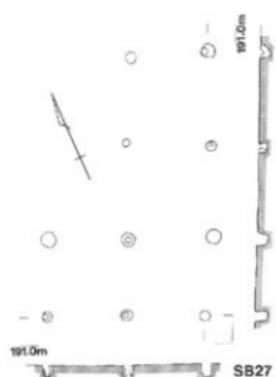
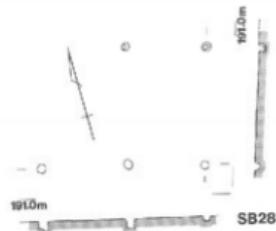


fig. 449 S B 24・27・28平面・柱穴断面図

S B29 6間×4間の南北棟の四面廂建物址である。柱掘形の埋土状況から、この建物の廃棄時に柱部材を抜き取ったと考えられる。



fig. 450 S B 29全景（南から）



fig. 451 S B 29全景（西から）

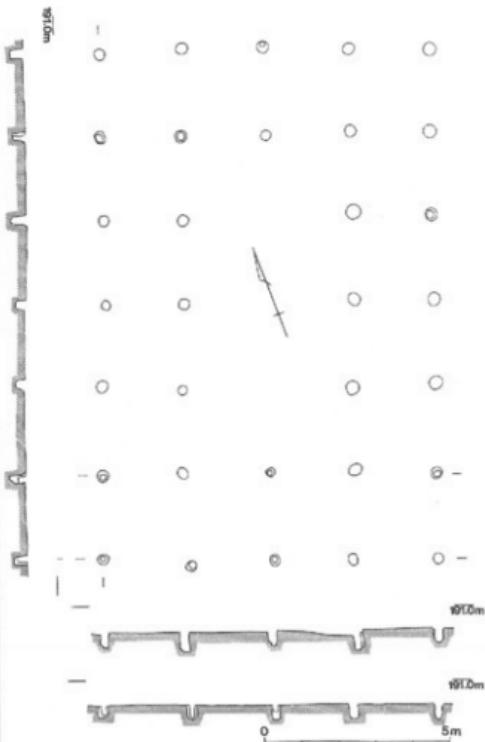


fig. 452 S B 29平面・柱穴断面図

S B30・31　南北4間、東西8間以上であるが、柱、柱掘形の規模からみて、西側5間分と東側の1間以上が対になる2棟の建物址と考えるほうがよさそうである。南北方向は4分検出されているが、これより北側は、IV区の調査でも削平が大きく、さらに北に建物が延びていた可能性はある。

S B30の柱穴は、S B23～29が30cm前後のものであるのに比べて、50cm前後と大きく、建物方位も今回確認されたなかでは、この1棟だけが東西棟である。

建物南辺には、幅40～60cm、深さ5～10cmの溝が設けられている。北辺は削平されており確認できず、西辺は地形が下がっており同一高では溝は存在しない状況であり、当初から設けられていないと推定される。この溝は、S B23・24のものが側柱に接するように設けられていたのに比べて、50～60cm離れて設けられている。

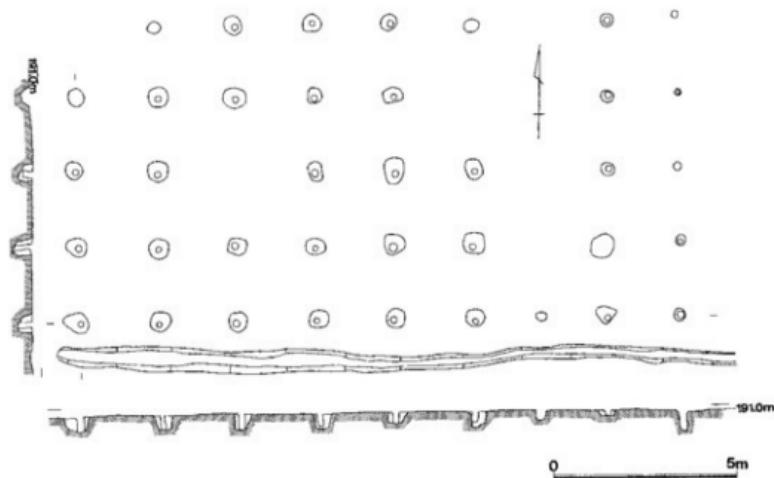


fig. 453 S B30・31平面・柱穴断面図

S B23・24・30では、雨落ち溝と考えられる建物に付随した溝が検出されたが、その形状から建物構造を推定すると、S B23は入母屋、S B30は切り妻と考えられる。また、S B23・24とS B30の溝が設けられる位置の違いは、建物の軒の長さを表しているものと推定される。

#### 土 坑

土坑は21基検出されたが、ほとんどは用途不明である。これらのなかには、土坑内に拳大から人頭大の石を入れているもの（SK1009・1010）などがある。

#### 河 道

これまでの調査Ⅰ～Ⅳ区で検出されたものに続く河道が検出された。

建物番号	構成規模(間) 桁行×梁行	規 模 (m) 桁行×梁行	面 積 (m <sup>2</sup> )	方 位
S B23	6×4	15.4×9.6	148	N 18° 30' E
S B24	4×2	7.4×7.2	53	N 28° E
S B25	5×(3)	14.8×(7.8)		N 16° E
S B27	(3)×(2)	(7.0)×(4.4)		N 26° E
S B28	(1)×(2)	(3.1)×(4.5)		N 17° 30' E
S B29	6×4	13.5×9.0	122	N 22° 30' E
S B30	5×(4)	10.8×(7.9)		N 89° E
S B31	(1)×(4)	(1.9)×(7.9)		N 89° E

表2. 提立柱建物址一覧表

### 出土遺物

今回検出された各遺構より須恵器、土師器の出土がみられたが(fig.454～456, fig.458～463)、S B23柱穴内および建物に付随する溝SD901では、建物の廃棄時および溝の埋没時と考えられる土器類が出土している(fig.455)。S B23・SD901の土器には、須恵器塊・皿、土師器塊・皿があり、土師器は底部に糸切り痕を残すものである。SP914出土の土師器(fig.454-5～8)は静止糸切りである。SD901出土の塊形のもの(fig.455-11)は土師質で、他と胎土、色調が異なり、わずかにヘラ磨き痕が認められる。出土遺物より、今回の調査で検出された掘立柱建物址等は、12世紀初頭を前後する時期を中心に考えられるが、SB24はやや古い時期に属すると思われる。

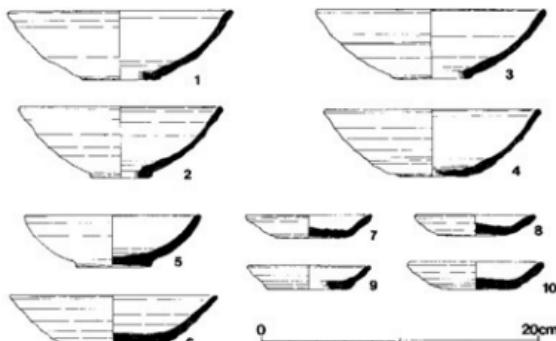


fig.454

S B23柱穴出土土器

- 1～4：須恵器
- 5～10：土師器
- 1・2：SP913
- 3：SP929
- 4：SP918
- 5～8：SP914
- 9：SP902
- 10：SP912

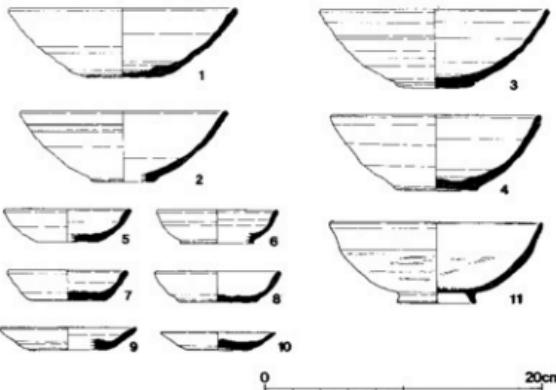


fig.455

區区SD901出土土器

- 1～8：須恵器
- 9～11：土師器

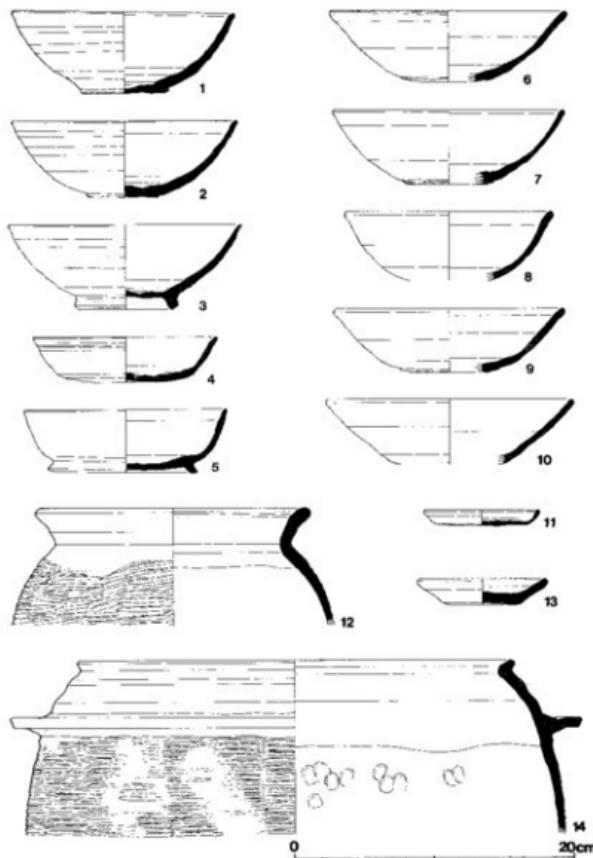


fig. 456

Ⅷ・Ⅹ区建物柱穴

土坑・溝出土土器

1~11: 須恵器

12~14: 土師器

1: SB25

2: SB29

3: SB24

4: SD1003

5: 河道

6: SK1009

7・12: SK901

8: SK1005

9・11: SK1010

10: SK1007

13: SK1004

14: SB30

### 3.まとめ

これまでの上小名田遺跡の調査により、34棟以上の掘立柱建物址が検出され、また、出土遺物では平安時代中葉から鎌倉時代初頭にかけての、従来あまり知られていなかった当地域（西摂北部）の様相を知る資料を得ることができた。

出土遺物では、須恵器、土師器を中心に施釉陶器や黒色土器などがみられ、特に土坑出土遺物を中心に比較的まとまった資料が得られた (fig. 458・459・461)。また、縁釉陶器香炉片や石帶も出土している。

遺構では、四面廂や大規模な建物址が検出され、これら一群の建物址は一般の集落とは異なった様相を示しており、建物址の時期あるいは時期別

の棟数などとともに、集落全体からみたこれら建物群の性格については今後の検討が必要である。

これまでの調査結果から、上小名田遺跡は10世紀後半に建物が現れ、それらは調査地のV区を南端とする50m四方程の範囲に集中している。その後11～12世紀にかけて、旧河道（11世紀頃には埋没）の東側の微高地上に集落が営まれる。また、この時期になり、旧河道の低地の西側（藤井利章氏調査・教育委員会試掘調査）および南西（吉尾遺跡）にも集落が現れ、かなり広範囲な集落として発展していったことが窺える。



fig.457  
据立柱建物址  
造構配置(模式)図

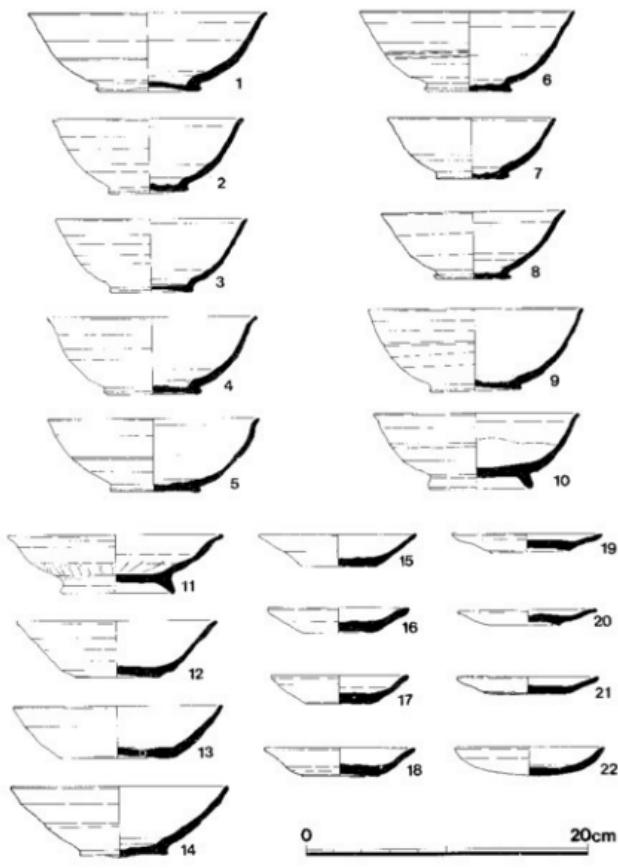


fig. 458

S K 617出土土器

1 ~ 9 : 須毛器

10 : 灰釉陶器

11~22 : 土師器

fig. 459

S K 617出土黒色土器

1 + 2 : A類

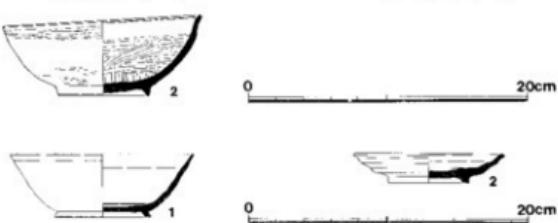
3 : B類

fig. 460

S X 601出土土器

1 : 緑釉陶器

2 : 須毛器



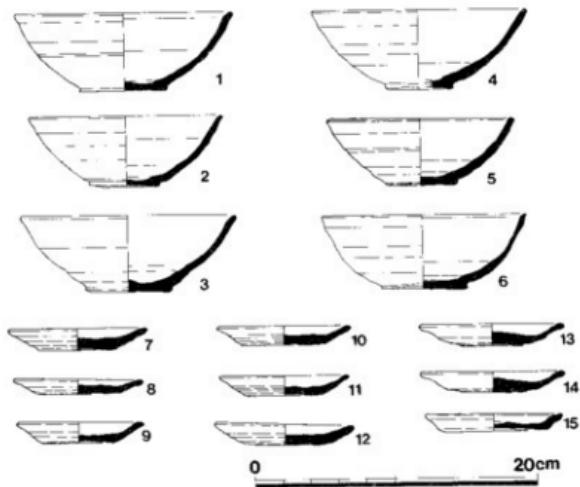


fig. 461  
SK 636出土土器  
1~6:須恵器  
7~15:土師器

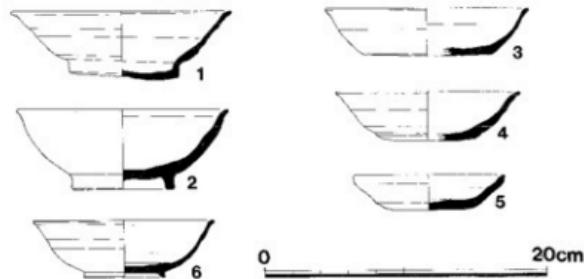


fig. 462  
SD 601出土土器  
6:縄釉陶器  
他:須恵器



fig. 463  
包含層出土縄釉陶器

## 37. 下二郎遺跡

## 1. はじめに

下二郎遺跡は、蛇行して北流する有野川下流域右岸の河岸段丘上に立地する遺跡である。

これまで有野川下流域では、開発が少ないこともあって、埋蔵文化財の存在についてはあまり周知されておらず、有野川右岸の道場町日下部から有野町二郎にかけて点在するオキダ古墳群や二郎古墳群などの古墳時代後期の古墳群が知られる程度で、集落遺跡についてはいまだ判然とはしていない状況である。

昭和63年度に、神戸三田線歩道設置工事施工路線について、試掘調査を実施したところ、計画路線の約2/3の範囲で平安時代から中世にかけての遺跡の存在が確認された。また同年に有野町有野で調査を実施した結果、溝状遺構やピットなどが確認された。

今回の調査地点は、下二郎に位置し、二郎古墳群のほぼ西方約300mにあたる。



fig. 464 調査地位置図 S = 1 : 5000

なお、1～3トレンチは、平成元年4月26日から5月10日まで神戸市教育委員会が調査を行い、4、5トレンチは、平成元年8月4日から8月28日まで、側神戸市スポーツ教育公社が調査を担当した。

## 2. 調査の概要

調査地区は、北側からそれぞれ1トレンチ、2トレンチ、4トレンチ、3トレンチ、5トレンチと呼称して、調査を順次進めていった。

### 1トレンチ

1トレンチは、幅1.5～2.0m、長さ15mで、基本層序は、耕土直下が淡黄色シルト混じりの細砂～中砂からなる基盤層で、遺物包含層は全く存在しない。

検出できた遺構には、土坑2基、溝状遺構1条、ピット2基がある程度で、遺構の密度は高くない。

### S K01

S K01は、長径1.14m、短径0.72m、深さ0.12mを測る楕円形の土坑で、南辺がS P02によって切られている。土坑底の東端部分には須恵器壺蓋を2個体南北に並べて伏せた状態で置かれており、中央では坑底からやや浮いているものの鉄製小刀1本が検出されている。須恵器の検出状態からみると土器枕の可能性が指摘できる。

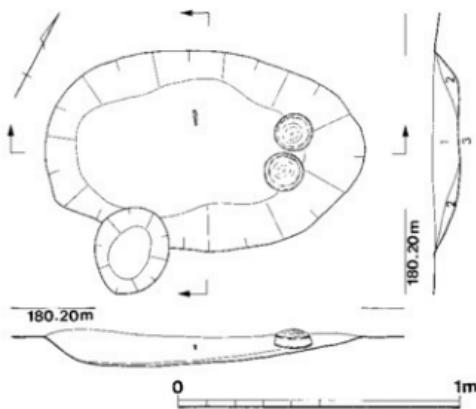


fig.465 1トレンチSK01平面・断面図

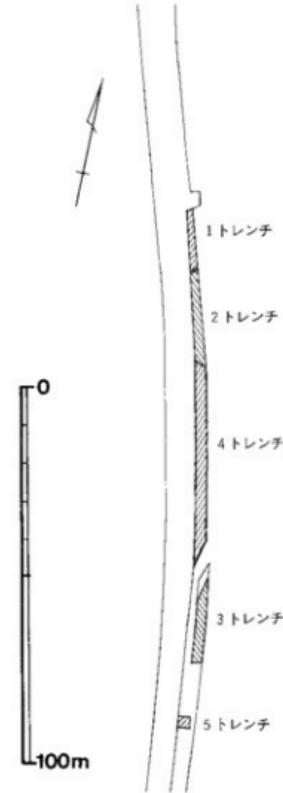


fig.466 トレンチ配置図



fig.467

1 トレンチ

SK01近景

(北から)

SK02 また、隣接して営まれているSK02もほぼ同一の形態を探るが、出土遺物に土師器の小片がある程度で、その性格については明らかにできない。

SD01 SD01は東西方向に流れる溝状遺構で、幅約80cm、深さ20cm前後を測る。埋土は黒褐色シルト混じり中砂～粗砂で、弥生土器の小片が出土している。

2 トレンチ 2トレンチは、幅約1.8～2.5m、長さ約23mのトレンチで、基本層序は、耕土、床上、淡灰褐色系砂質土（遺物包含層）、淡黄色シルト混じり細砂からなる基盤層の順である。北端部分は基盤層が徐々に下がっていくにつれて、遺物包含層が厚く堆積しており、遺存状態が良好な古墳時代後期の須恵器が出土している。

検出した遺構には、土坑4基、ピット7基、落ち込み3基などがある。

SX03 SX03はトレンチ南半の西半分を占める大きな落ち込みで、最大幅2.35m、深さ20cmを測る埋土は黒褐色シルト質細砂を主体としており、弥生土器と土師器が出土しており、須恵器は全く共伴していない。

SK04 SK04は、直徑約60cm、深さ40cmを測る円形の土坑である。埋土は黒褐色シルト混じり細砂～中砂で、土師器が若干出土している。



fig.468 2トレンチ全景 (北から)

**ピット** ピットについては、大小の規模のものがあり、掘立柱建物址を構成するまでには到らない。

**3 トレンチ** 3 トレンチは、幅約2.5m、長さ約25mのトレンチである。検出した遺構には、ピット4基、土坑3基、落ち込み2基がある。これらの遺構の大半は、トレンチの南半部に集中しており、暗褐色粘質土の遺物包含層を除去した段階で検出した。埋土は概ね暗褐色シルト質細砂である。

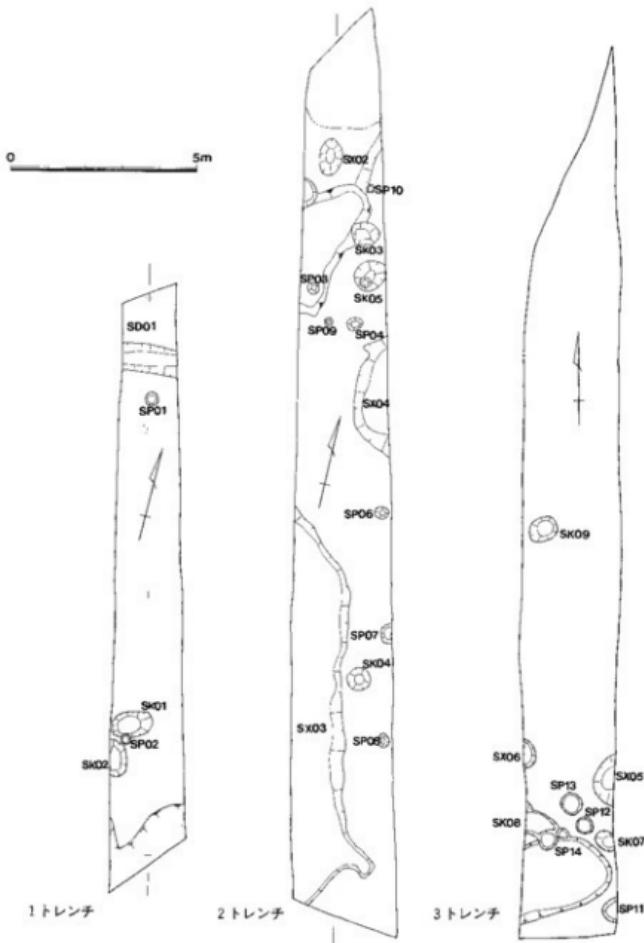


fig. 469  
1・2・3  
トレンチ  
平面図

**ピット** ピットは直径40～60cm、深さ5～9cmを測る。S P12の内部に拳大の円礫が検出されたほかは、遺物は出土しておらず、遺構の性格は不明である。

**土坑** 土坑は平面形が橢円形を呈するものと不整形を呈するものがある。橢円形のSK09は長径80cm、短径64cm、深さ23cmを測り、SK07は一部が調査区域外である。SK08は不整形な土坑で、長径80cm、短径64cm、深さ23cmを測り、須恵器と土師器が出土している。

**落ち込み** SX05・06は約半分が調査区域外にあるが、本来は円形を呈する落ち込みと考えられる。遺構の規模は、現存値で、SX05が長径1.4m、短径55cm、SX06が長径79cm、短径32cmを測る。

**4・5トレチ** 5トレチにおいては搅乱が著しく、遺構・遺物を確認し得なかつたが、4トレチにおいては2面の遺構面が確認され、第2遺構面において、弥生時代後期～古墳時代後期に属すると考えられる遺構を検出した。

**基本層序** 4トレチは上層より現代盛土、耕土、床土、暗茶灰色砂質土、暗灰色砂質土、青灰色中砂層の順で、暗茶灰色砂質土の上面が第1遺構面、青灰色中砂層の上面が第2遺構面となっている。

4トレチの北端部は他の部分と層序が異なり、耕土、床土の下層が灰褐色砂質土、濃灰茶色砂質土の順で、第1遺構面に準ずる面は存在せず、濃灰茶色砂質土の上面が第2遺構面に相当する。

暗灰色砂質土、灰褐色砂質土の各層が遺物包含層と考えられ、弥生時代後期～平安時代後期の遺物が検出されている。

また、第2遺構面の下層については、遺構・遺物が確認されなかつた。

5トレチはすべてが搅乱内のため、層序の確認が不可能であった。



fig.470 3トレチ全景（南から）



fig.471 3トレチ南端の遺構群（東から）



fig.472 4トレンチ第2造構面（南から）



fig.473 4トレンチ第2造構面（北から）



fig.474 4トレンチ第2造構面北端部（北から）

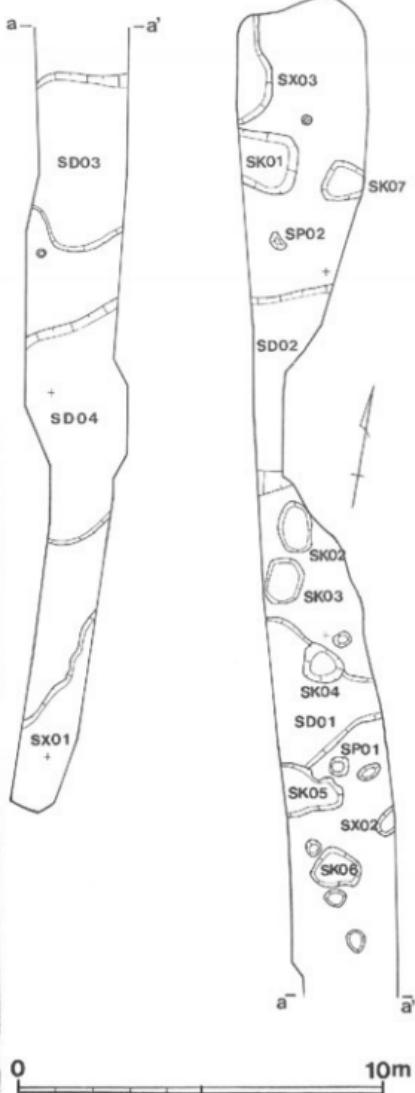


fig.475 4トレンチ平面図

**第1遺構面** 溝状遺構1条と小規模なピット状遺構を4基確認したのみで、遺物はなく、その時期は不明である。

**第2遺構面** 溝状遺構4条（S D01～04）、土坑状遺構7基（S K01～07）、ピット状遺構9基（S P01, 02他）、不定形落ち込み状遺構3基（S X01～03）が検出された。

S D03・S P01が弥生時代後期、S K03が古墳時代後期の遺構であることがその出土遺物から確認できたものの、その他の遺構については出土遺物が細片であるため、時期が判然としない。

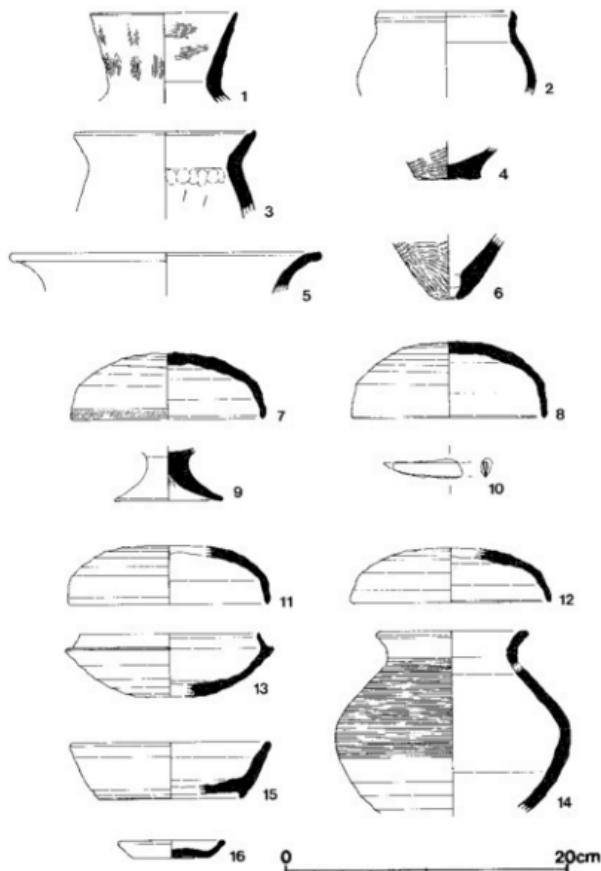


fig.476

1～3 トレンチ  
出土遺物

1～6 : 2 トレンチ

SX03

7～10 : 1 トレンチ

SK01

11～15 : 2 トレンチ

遺物包含層

16 : 3 トレンチ

### 3. まとめ

今回の調査では、各々のトレーニングから、有野川流域では知られていなかった、様々な重要な成果を収めることができた。時期別にみて、まとめてかえたい。

- (1) 弥生時代後期～古墳時代前期に比定できる遺構・遺物が確認され、周辺に集落址の存在が想定できること。
- (2) 古墳時代後期では、S K01が土坑墓の可能性が考えられる点から、近接地に集落本体が推定できること。また、この集落は丘陵上に立地する二郎南古墳群などの古墳時代後期の古墳群と密接な関わりをもつ集団像が推定できること。
- (3) この他に、平安時代～中世の遺物も少量ながら出土しており、当該期の遺跡の広がりも予想できる。

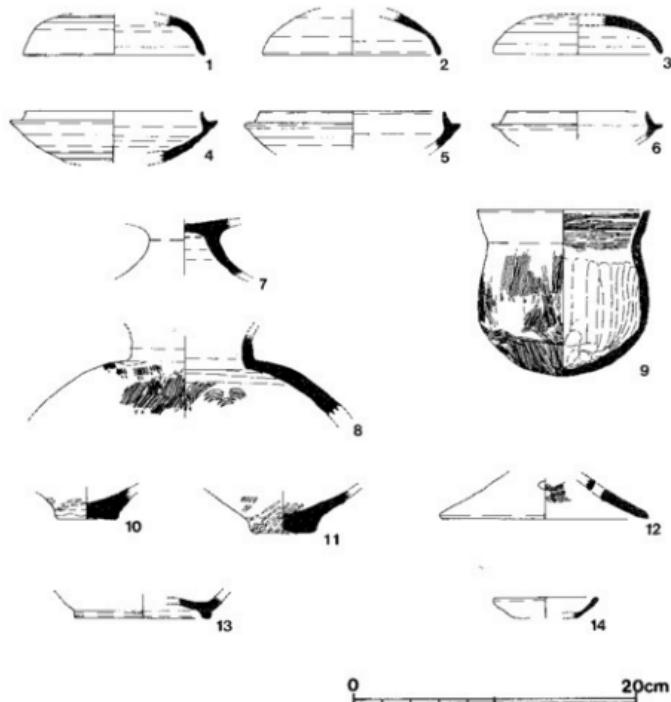


fig. 477 4 トレーニング出土土器 2・11: S D01 12: S D03 3・7: 灰褐色砂質土  
1・4～6・8～10: 暗灰色砂質土 13・14: 暗茶色砂質土

### III. 平成元年度の保存科学処理

平成元年度に保存科学の手法によって行った作業は、遺構に対する作業と遺物に対する作業に大きく分けることができる。以下はその主な概要である。

#### 1. 遺構に関する作業

- (1) 神出遺跡 本年度の神出遺跡の調査において、第6トレンチで「窯状遺構」を1基検出した。「窯址」とするならば、これまでに同じ遺跡で検出されている「グルマ窯」と同程度の規模となる。現地での保存が困難であったため、切り取りによって保存を図ることになった。その方法としては、全体を発泡ウレタンで梱包して取り上げを行った。



fig. 478 「窯状遺構」の周囲を掘り下げる



fig. 479 「窯状遺構」を保護するために和紙を貼る



fig. 480 裏側を掘り下げた後、合成樹脂を塗る



fig. 481 表面からも合成樹脂を塗り、土を固める

(2)戎町遺跡

本年度の戎町遺跡の第4次調査において、第1次調査と同様に弥生時代前期の河道の底に、円形あるいは方形の杭列遺構を検出している。その内のSX126の底に、網代が認められた。網代は腐朽が進み、極めて柔らかくなり、薄くなっている。そのため、このままの状態では取り上げることが困難であることから、杭列ごと切り取り、取り上げを行った。方法は発泡ウレタンによる全体の梱包である。

同様の方法によって、2カ所で網代と1カ所で箕を取り上げている。箕は裏側の土を全て取り除き、裏側からも調査を行った。



fig.482 SX126 上半の杭をはずす



fig.485 同左 裏側から土を取り除き、杭の下半部を検出し、記録を取る



fig.483 同上 和紙で全体を保護



fig.486 「箕」ウレタンで梱包し取り上げた後に、裏側の土を取り除き、記録を取る



fig.484 同上 全体を発泡ウレタンで梱包

(3)天王山  
5号墳

昭和61年度に調査を実施した天王山5号墳は、4基の埋葬施設を持つ、古墳時代前半の方墳である。調査終了後、現地は現状保存されていたが、最終的に現地での保存が不可能となったため、原位置から東へ約50mの地点への移設が決定した。

墳丘はすでにかなり流失していたため、埋葬施設のみを3分割し、鋼材と発泡ウレタンで梱包している。本年度は、とりあえず仮置き場に搬入し、移設先の造成が終了した段階に、復元墳丘の下に埋め込む計画である。

作業は、株式会社近畿ウレタン工事が行った。



fig.487  
発泡ウレタンで  
全体を梱包



fig.488  
下部は鋼板と  
H鋼で切り離す



fig.489  
2台のクレーン車で  
吊り下ろす

(4)本山遺跡 本山遺跡では、埋納遺構に伴う銅鐸が1口出土し、注目を浴びた。この埋納遺構を含む1.2m×1.2m×1.0mの範囲を、今後の追証と展示、活用を目的として、切り取りを行った。

その後、上面及び4側面の土壌を合成樹脂で固め、軽量化を図るために、内部の土をできるだけ取り除き、発泡ウレタンを充填している。

現在、神戸市埋蔵文化財センターにおいて展示している。

作業は、株式会社近畿ウレタン工事が行った。



fig.490  
神戸市埋蔵文化財  
センターでの展示

## 2. 遺物に関する作業

(1)本山遺跡 本山遺跡から出土した銅鐸の内部には、土壌がある程度詰まっていた。この土壌が、埋納時に詰められたものなのか、あるいは当初空洞であった部分に周辺の土壌が流入したものかについての解釈が問題とされた。

処理に先立ち、この内部の土壌を取り除く必要があった。しかし、無造作に取り除くと、除去後の観察が不可能になることから、最低限の記録法として、鋸部付近での土層転写を行った。その後、横断方向に約1cmずつ土壌を取り除き、土壌の観察と写真撮影を行った。

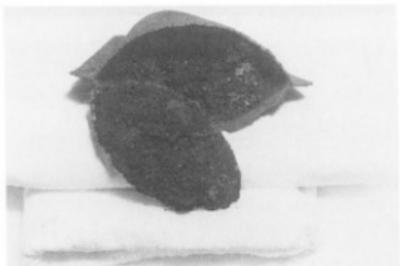


fig.491 銅鐸内面の土壌の土層転写



fig.492 銅鐸内面に付着している白色析出物

## (2)木製品

市内から出土した木製品については、実測図作成、樹種同定、写真撮影登録などの手順を経てから、ポリエチレングリコール（PEG4000）含浸法による保存処理を行っている。

しかし、現場での調査中に、木製品が姿を現してから、写真撮影、出土実測図作成などの作業の間に、乾燥により変形してしまうことがある。特に夏期にはその傾向が著しく、現状では、作業の迅速化、水を含ませた布などを被せる、PEG1500の塗布等が対応策としてとられている。しかし腐朽の著しいものについては、これらの対応作業時に接触する際に壊れてしまう場合も多い。



fig.493  
乾燥により変形した杭の上端  
上端のみ数週間露出、その結果、厚みが約半分に縮んでしまった。



fig.494 1点ずつ不織布で梱包



fig.495 PEG含浸槽に入れる

### (3)動物遺体

弥生時代前期の環濠集落である大開遺跡からは、竪穴住居址、貯蔵穴、環濠などから比較的小さい動物遺体が数百点出土している。

これらの内、調査中に動物遺体として認識されていたものもあるが、その多くは劣化が激しく、そのままでは取り上げることができず、土ごと取り上げたものが多い。土壤の水洗洗浄作業により初めて検出できたものもある。

土ごと取り上げたものは、エチルアルコールと筆を用いて、慎重に土を取り除き乾燥させる。その後、アクリル系樹脂（パラロイドB72）を塗布する。ばらばらになる恐れのあるものは型取り用粘土を台座として固定し、石膏等で補強した後に反転する。反転後同様の作業を繰り返し、最終的にアクリル系樹脂を再度減圧含浸している。

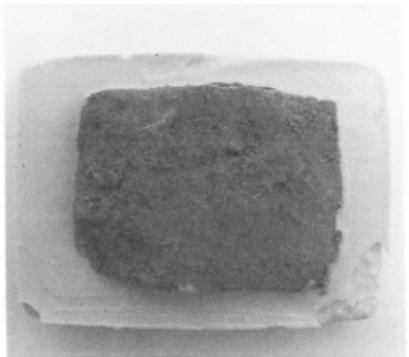


fig.496 取り上げ時の状態



fig.497 上面の土を取り除く

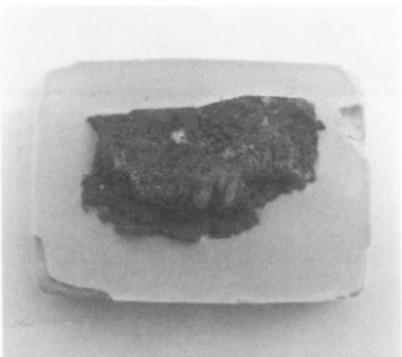


fig.498 取り上げ時の状態



fig.499 处理後

## 平成元年度 神戸市埋蔵文化財年報

---

平成4年3月印刷

平成4年3月発行

発行 神戸市教育委員会  
神戸市中央区加納町6丁目5番1号  
TEL(078)331-8181

印刷 有限会社アロエ印刷  
神戸市中央区中町2丁目3番8号  
TEL(078)371-3831

---

広報印刷物登録・平成3年度 第294号A-6類